

南地心中

泉鏡花作

一

「今のは、」

「初阪ものゝ赤毛布、と云ふ處を、十月の半ば過ぎ、小春風で、些と逆上せるほどな暖かさに、下着さへ襲ねて重し、野暮な縞も隠されず、頬被りがはりの鳥打帽で、朝から見物に出掛けた。此の初阪とは、傳へ聞く、富士、淺間、大山、筑波、はじめて、出立つを初山と稱ふるに倣つて、大阪の地へ初見參と云ふ意味である。」

其の男が、天満橋を北へ渡越した處で、同伴のものに聞いた。

「今のは？」

「大阪城でございますさ。」

と片頬笑みで故と云ふ。結城の藍微塵の一枚着、唐棧柄の袷羽織、茶献上博多の帯をぐいと緊め、白柔皮の緒の雪駄穿で、髪をすつきりと刈つた、氣の

利いた若いもの、風俗は一目で知れる・・・・俳
優部屋の男衆で、初阪ものには不似合な傳法。

「まさか、天満の橋の上から、淀川を控へて、
城を見て——當人寐が足りない處へ、恚う照つ
けられて、道頓堀から千日前、此の邊の沸くり返る
町の中を見物だから、茫と成つて、夢を見たやうだ
けれど、夫だつて、大阪に居る事は確に承知の上で
す——言はなくつても大阪城だけは分らうぢや
ないか。」

「御道理で、ふゝふ、」

男衆はまた笑ひながら、

「ですがね、欄干へ立つて、淀川堤を御覽なさる
と、貴方、恍惚とお成んなさいましたぜ。熟と考へ
込んでお了ひなすつて、何かお話しするのもお氣の
毒なやうな御様子ですから、私も黙りでね。

えゝ、・・・・時間都合で、其方へは廻らない
までも、網島の見當は御案内をしろつて、親方に吩
附かつて参つたんで、彼處で一ツ、櫻宮から網島を
口上で申し上げようと思つて居たのに、餘り腕組を

なすつたんで、いや、案内者、大きに水を見て涼み
ました。

其から、ずつと黙りで、橋を渡つた處で、（今の
は、）とお尋ねなさるんでさ、義理にも大阪城と申
さないぢや、第一日本一の名城に對して、はゝゝ、
「
ともものあり氣に一寸顔を見る。

初阪は鳥打の庇に手を當て、
「分りましたよ。眞田幸村に對しても、決して粗
略には存じません、萌黄色の海のやうな、音に聞い
た淀川か、大阪を眞二つに分けたやうに悠揚流れる。

電車の塵も冬空です・・・澄透つた空に晃々
と太陽が照つて、五月頃の潮が押寄せるかと思ふ人
通りの激しい中を、薄い霧一筋、岸から離れて、宛
然、東海道で富士を視めるやうに、あの、城が見え
たつけ。

川蒸汽の、ばら／＼と川浪を蹴るのなんぞは、高
櫓の瓦一枚浮かしたほどにも思はれず、・・・

船に掛けた白帆くらゐは、城の壁の映るのから見れば、些細な塵です。

其の、空に浮出したやうな、水に沈んだやうな、
而して幻のやうな、然うかと思ふと、歴然と、あゝ、
あれが、嬰兒の時から桃太郎と一所にお馴染の城か、
と思つて見て居ると、城の其の屋根の上へ、山も見
えぬのに、鶴が乗つて來さうな雲が、眞黒な壁で上
から壓附けるばかり、鉛を熔かして、むら／＼と湧
懸つて來たらうではないか。」

初阪は意氣を込めて、杖をわきに挟んで云つた。

七筋ばかり、工場の呼吸であらう、黒煙が、恚う、
 風がないから、眞直に立騰つて、城の櫓の棟を巻い
 て、其の蔽被つた暗い雲の中で、末が亂れて、むら
 〃と崩立つて、倒に高く淀川の空へ靡く。・・

なびくに脈を打つて、七筋ながら、處々、斜めに
 太陽の光を浴びつゝ、白泡立てゝ渦いた、其の凄か
 った事と云つたら。

天守の千疊敷へ打込んだ、關東勢の大砲が炎を吐
 いて轉がる中に、淀君をはじめ、夥多の美人の、練
 衣、紅の袴が寸断々々に、城と一所に滅ぶる景色が、
 目に見える。・・・雲を貫く、工場の太い煙は、
 丈に餘る黒髪が、纏れて亂れるやう、而して、倒に
 立つたのは、長に消えぬ人々の怨恨と見えた。

大河の兩岸は、細い樹の枝に、薄紫の靄が、すら
 〃。蒼空の下を、矢輻の晃々と光る車が、駈けて

も居たのに、……水には帆の影も澄んだのに、……何うして其の時、大阪城の空ばかり暗澹として曇つたらう。

「あゝ、あの雲だ。」

と初阪は橋の北詰に、ひし／＼と並んだ商人家の、軒の看板に隠れた城の櫓の、今は雲ばかりを、フト仰いだ。

が、俯向いて、足許に、二人連立つ影を見た。

「大丈夫だらうかね。」

「雷様ですか。」

男衆は逸早く心得て、

「串戯ぢやありませんぜ。何の今時……」

「そんなら可いが、」

歩行出す、と暗く成り掛けた影法師も、烈しい人の脚の塵に消えて、天満筋の眞晝間。

初阪は晴やかな顔をした。

「凄かつたよ、私は。」

其の癖、此の陽氣だから、自然と淀川の水氣が立つ、陽炎のやうなもの

か、ひら／＼と、其が櫓の面へかゝると、何となく、
ニと美しい幻が添つて、城の名を天下に彩つて居る
やうに思はれたつけ。其の花やかな中にも、しかし、
長い、濃い、黒髪が潜んで、瀧のやうに動いて居
た。

城を語る時、初阪の色酔へるが如く、土地馴れぬ
足許は、ふらつくばかり危まれたが、對手がしやんと
來いの男衆だけ、確に引受けられた酔漢に似て、
擦合ひ、行違ふ人の中を、傍目も觸らず饒舌るので
あつた。

「時に、其について、」

「あの、別嬪の事でせう。私たちが立停まつて、
お城を見て居ました。四五間さきの所に、美しく
立つて、同じ方を視めて居た、あれでせう。」

「貴方が（今のは！）ツて一件は。それ、奴を一人、
お供に連れて、」

「奴を……十五六の小間使だぜ。」

「當地ぢや、奴ツて然う言ひます。島田鬚に白丈

長をピンと刎ねた、小凜々しい。お約束でね、御寮人には付きものゝ小女ですよ。あれで御寮人の鬚が、元禄だつた日にや、菱川師宣ゑがく、と云ふんですね。

何だらう、とお尋ねなされるのは承知の上でさ、……又、今のを御覧なすつて、お聞きなされないぢや、大阪が怨みます。」

「人が悪いな、此の人は。其まで心得て居て、はぐらかすんだから。（大阪城でございます、）は些と癩だらうぢやないか。」

「はゝはゝ。」

「しかし縁のない事はない。然うして、熟とあの、煙の中の凄い櫓を視て居ると、何うだらう。」

四五間前に、上品な繪の具の薄彩色で、イんで居た、今の、其の美人の姿だがね、……淀川の流れに引かれた、私の目の所爲なんだらう。すつと向うに浮いて行つて、遠くの、あの、城の壁の、矢狭間とも思ふ窓から、顔を出して、此方を覗いた。

然さう見みえた。何い時つの間まにか、城しろの中なかへ入はつて、向む直きなほつて。

黒くろくも雲もの下した、煙けむりの中なかで、凄すこいの、美うつくしいの、と云いツて、そりやなかつた。」

「だから、何だか容易ならん事が起つた、と思つて、……口惜しいが聞くんです。

實はね、昨夜、中座を見物した時、すぐ隣りの棧敷に居たんだよ、今の婦人は、と頷くやうにして初阪は云ふ。

男衆は又笑つた。

「ですとも。其を知らん顔で、しらばつくれて、唯今一見と云ふ顔をなさるから、はぐらかして上げましたんでさ。」

「だつて、住吉、天王寺も見ない前から、大阪へ着いて早々、あの婦人は？ でもあるまいと思ふ。それぢや慌て過ぎて、振袖に躓いて轉ぶやうだから、瘦我慢で黙然で居たんだ。」

「處が、辛抱が仕切れなく成つたでせう、御尤ですとも。親方もね、實は、お景物にお目に掛ける、丁度可いからツて、故と昨夜も、貴方を隣棧敷へ御

案内申したんです。

「附込みでね、旦那と来て居ました。取巻きに六七人藝妓が附いて。」

男衆の顔を見て、

「はあ、すると堅氣かい、以前は兎に角、」

又男衆は、恚う聞かれるのを合點したらしく頷くのであつた。

「貴方、當時また南新地から出て居るんで

す。．．．．否、旦那が變つたんでも、手が切れたのでもありません。矢張り昨夜御覽なすつた、あれが元からの旦那でね。え、然も、つい此の四五日前まで、久しく引かされて、櫻の宮の片邊と云ふのに、其こそ一枚繪に成りさうな御寮人で居たんですがね。あの旦那の飛んだもの好から、洒落に又鑑札を請けて、以前のまゝの、お珊と云ふ名で、新しく披露をしました。」と質實に話す。

「阪地は風流だね、洒落に藝者に出すなんざ、悟つたもんですぜ、根こぎで手活にした花を、人助け

のため拜ませる、と云ふ寸法だらう。私なんぞも、お庇で土産にありついたと云ふ譯だ。」

「否、隣棧敷の緋の毛氈に頬杖や、橋の欄干袖振掛けて、と云ふ姿ぐらゐではありません。貴方、もつと立派なお土産を御覽なさいませうよ。御覽なさいまし、明日、翌々日の晩は、唯今のお珊瑚の方が、千日前から道頓堀、新地をかけて寶市の練に出て、下げ髪、緋の袴と云ふ扮装で、八年ぶりで練りますから。」

一言、下げ髪、緋の袴、と云つたのが、目のあたり城の上の雲を見た、初阪の耳を穿つて響いた。

「何、下げ髪で、緋の袴？」
「勿論一人ぢやありません。――確か十二人、同じ姿で揃つて練ります。が、自分の髪を入髪なしに解ほぐして、其の緋の袴と擦れ／＼に丈に餘るつてのは、あの婦ばかりだと云つたもんです。一度引いて、最うそんなに経ちますけれども、私あ今日も、つい近間で見て驚きました。」

苦勞も道樂も爲たらうのに、雁金額の生際が、一厘だつて拔上がつて居ませんやね、ねえ。矢張入髪なしを水で解いて、寶市は屋臺ぐるみ、象を繫いで曳きませうよ。

旦那もね、市に出して、お珊さんの其の姿を、見たり、見せたりしたいばかりに、素晴らしく派手を遣つて、披露をしたんだつて評判です。

其の市女は、藝妓に限るんです。其も藝なり、容色なり、選抜きでないと、世話人の方で出しませんから……先づ選ばれた婦は、一年中の外聞と云つたわけです。

其の中のお職だ、貴方。何しろ大阪ぢや、濱寺の魚市には、活きた龍宮が顯れる、此の住吉の寶市には、天人の素足が見えるつて言ひます。一年中の紋目ですから、まあ、是非お目に掛けてませう。

貴方、一目見て立すくんで、

「立すくみは大袈裟だね、人間きが悪いぢやないか。」

「だつて、今でさへ、悚然なすつたぢやありませんか。」

四

男衆をとこじゆの浮うかせ調子てうしを、初阪はつざかは何故なぜか沈しづんで聞きく。

「眞個まことそりや悚然そつぜんとしたよ。ひとりでに、あの姿すがたが、城しろの中なかへふいと入はいつて、向直むきなほつて、此方こつちを見みるらしい氣きがした時ときは。

黒い煙くろけむりも、お珊さんさんか、．．．．其その人ひとのためために空そらに被かぶさつたやうに思おもつて。

天満てんまの鐵橋てつけうは、瀬多せたの長橋ながはしではないけれども、美濃みのへ歸かへる旅人たびひとに、怪あやしい手箱てばこを託たくけたり、俵藤太たはらとうたに加勢かせいを頼たのんだりする人ひとに似にたやうに思おもつたのだね。

由來ゆらい、橋はしの上うへで出會であふ綺麗きれいな婦をんなは、凡すべて凄すこいとしである。――

が、場所ばしょによるね．．．．昨夜ゆうべ、隣棧となりざしき敷きで見みた時ときは、同おなじ其その人ひとだけれど、今思いまおもふと、まるで、違ちがつた婦をんなさ。．．．君きみも關東くわんとうものだから遠慮えんりよなく云いふが、阪地かみがたの婦をんなは何故なぜだらう、生いきてるのか、死しんでるのか、血ちと云いふものがあるのか知しらん、と近きん所じよに居あるのも可厭いやなくらゐ、酷ひどく、さました事ことがあつたんだから――

「へい、何がございました。やたらに何か食べたんですかい。」

「何、詰らんことを・・・然うぢやない。餘りと言へば見苦しいほど、大入芝居の棧敷だと云ふのに、旦那かね、其の連の男に、好三昧にされてたからさ。」

「其處は妾ものゝ悲しさですかね。何うし
て・・・當人そんなぐうたらぢやない筈です。
意地張りも些と可恐いやうな婦でね。以前、藝妓で
居ました時、北新地、新町、堀江が、一つ舞臺で、
藝較べを遣つた事があります。其の時、南から舞で
出ました。尤も評判な踊手なんです、其でも他場
所の姉さんに、ひけを取るまい。・・・其の頃
北に一人、向うへ廻はして、些と目に餘る、家元隨
一と云ふ名取りがあつたもんですから、生命がけに
氣を入れて、舞つたのは道成寺。貴方、そりや近頃
の見ものだつたと評判しました。」

能がかりか、何か、白の鱗の膚脱ぎで、あの髪を
颯と亂して、ト撞木を被つて、供養の鐘を出た時は、

何となく舞臺が暗く成つて、其で振袖の襦袢を透いて、お珊さんの眞白な胸が、銀色に蒼味がゝつて光つたつて騒ぎです。

其のかはり、火のやうに舞ひ澄まして樂屋へ入ると、氣を取詰めて、ばつたり倒れた。後見が、回生劑を吞まさうと首を抱く。一人が、装束の襟を寛げようと、あの人の胸を開けたかと思ふと、キヤツと云つて尻持をついたは何うです。

鳩尾を緊めた白羽二重の腹巻の中へ、生々とした、長いのが一尾、蛇ですよ。畝々と巻込めてあつた、其奴が、のツそり、

と慌しい懷手、黒八丈を襲ねた襟から、拇指を出して、ぎつくり、と蝮を拵へて、肩をぶる／＼と遣つて引込ませて、

「鎌首を出したは何うです、いや聞いても恐れる。」とばた／＼と袖を拂く。

初阪も其は爲兼ねない婦と見た。

「執念の深いもんだから、あやかる氣で、生命がけの膚に絡つたと云ふわけだ。」

「其もありませす。ですがね、心願も懸けたんですとさ。何でも願が叶ふと云ひませす。……呪詛も、戀も、情も、慾も、意地張も同じ事。……其の時鳩尾に巻いて居たのは、高津邊の蛇屋で賣りませす。……大瓶の中にぞろ／＼、と云ふ一件もので、貴方御存じですか。」

初阪は出所を聞くと悚然とした。我知らず聲を潜めて、

「知ツてる 生紙の紙袋の口を結へて、中に筋張つた動脈のやうにのたくる奴を買つて歸つて、一晩内に寝かしてそれから高津の宮裏の穴へ放すんだつてね。」

「え、然うですよ。其の時、願事を、思込んで言聞かせます。而して袋の口を解くと、による／＼と這出すのが、屹と一度、目の前でとぐるを巻いて、首を擡げて、其の人間の顔を熟と視て、それから横穴へ入つて隠れるつて言ひます。

其のくらゐ念の入つた長蟲ですから、買手が来て、蛇屋が貯へた其の大瓶の壓蓋を外すと、何ですとさ。黒焼の証文の時だと、うぢや／＼我一に下へ潛つて、瓶の口がぐつと透く。．．．．放される客の時だと、ぬら／＼争つて頭を上げて、瓶から煙が立つやうですつて、．．．．もし、不氣味ですなえ。」

初阪は背後状に仰向いて空を見た。時に、城の雲は、賑かな町に立つ埃よりも薄かつた。

「思懸けず、何の廣告か、屋根一杯に大きな布袋の繪があつて、下から見上げたものゝ、宛然唐子めくの、思はず苦笑したが、

「昨日も其の話聞きながら、兵庫の港、淡路島、煙突の煙でない處は残らず屋根ばかりの、大阪を一

目に見渡す、高津の宮の高臺から……湯島の女坂に似た石の段壇を下りて、其から黒焼屋の前を通つた時は、軒から眞黒な氷柱が下つてるやうに見えて冷りとしたよ。一時に寒く成つて——唯さへ拂上り湧立つてる大阪が、あの又境内に、おでん屋、てんぷら屋、煎豆屋、とくわつ／＼ぐら／＼と、煮立て、蒸立て、焼立て、其が天火に曝されて居るんだからね——びつしより汗に成つたのが、お庇ですつかり冷く成つた。但し餘り結構なお庇ではないのさ。

大阪へ来てから、お天氣續きだし、夜は萬燈の中に居る氣持だし、何しろ暗いと思つたのは、町を歩行く時でも、寝る時でも、黒焼屋の前を通つた時と、今しがた城の雲を見たばかりさ。」

男衆は偶と言を挟んで、

「何を御覽なさる。」

「否ね、今擦達つた、それ、」

と一寸振向きながら、

「それ、あの、忠兵術の養母と云つた隠居さんが、

紙袋を提げて居るから、」

「串戯ぢやありません。」

「私は例のかと思つた、……」

「ありや天満の龜の子煎餅、……成程龜屋の隠居でせう。誰が、貴方、あんな婆さんが禁厭の蛇なんぞを、」

「は、あ、少いものでなくつちや、利かないかね。」

「そりや色戀の方ですけれど、……慾の方と成ると、無差別ですから、老年は尚ほ烈しいかも知れません。」

分けて此の二三日は、黒焼屋の蛇が賣れ盛るつて言ひます……誓文拂で、大阪中の呉服屋が、年に一度の大見切賣をしますんでね、市中も此の通り又別して賑ひまさ。

心齊橋筋の大丸なんかでは、景物の福引に十兩二十兩と云ふ品ものを發奮んで出しますんで、一番引當てよう了簡で、禁厭に蛇の袋をぶら下げて、杖を支いて、お十夜と云ふ形で、夜中に霜を踏んで、白髪で橋を渡る婆さんもあるにやあるんで。」

男衆も一寸町中を二した。

「眞個かも知れませんが、何しろ、此の誓文拂の前に、何千條ですかね、黒焼屋の瓶が空虚に成つた事があるつて言ひますから。慾は可恐しい。悪くすると、ぶら提げてるのに打撞らないとも限りませんよ。」

「それ！ だから云はない事ぢやない。」

内端ながら二つ三ツ杖を掉つて、

「其でなくツてさへ、恚う見渡した大阪の町は、通も路地も、何の家も、くわツと陽氣に明い中に、何處か一個所、陰氣な暗い處が潜んで、禮儀作法も、由緒因縁も、先祖の位牌も、色も戀も罪も報も、三世相一冊と、今の蛇一疋づゝは、主に成つて隠れて居さうな氣がする處へ、蛇瓶の話を昨日聞いて、まざ／＼と爪立足で、黒焼屋の前を通つてからと云ふものは、うつかりすると、新造も年増も、何か下搔の褌あたりに、一條心得居さうで成らない。

昨夜も、芝居で・・・

男衆は思出したやうに、如才なく一ツ手を拍つた。

「時に、何うしたと云ふんですえ、お珊さんが、
其の旦那と？・・・」

「まあ、お聞き　ー　隣合つた私の棧敷に、髪
を桃割に結つて、緋の半襟で、黒縹子の襟を掛けた、
黄の勝つた八丈と云つた柄の着もの、紬か何か、緋
の羽織をふつくりと着た。ふさ／＼の簪を前のめり
に挿して、それは人柄な、目の涼しい、肩の優しい、
口許の柔順な、まだ肩揚げをした、十六七の娘が、
一人入つて居たらう。・・・出来るだけおつく
りをしたらうが、着ものも帯も、餘りいゝ家の娘ぢ
やないらしいのが、」

「居ました。へい、親方が、貴方に差上げた棧敷
ですから、人の入る譯はないが、と云つて、私が伺
ひましたつけ。貴方が、（構ひやしない。）と仰有
るし、其處はね、大したお目觸りのものではな
し・・・あの通りの大入で、一寸退けようツて
空場も見つかからないものですから、其なりでお邪魔
を願ツて置きました。

後あとで聞ききますと、出方でかたが、しんせつに、まあ、喜よろこばせて遣やらうツて、内々ないくで入れたんださうで。ありや何なんですツて、逢阪あふさ下の辻つじ　　えゝ、天王寺てんわうじに行くゆく道みちです。公園こうえん寄よりの辻つじに、屋臺やたいに一寸毛ちよつとけの生はえたくらゐの小さな店みせで、あんころ餅もちを賣うつて居ゐる娘むすめださうです。いゝ娘こですね。」

其それは初阪はつさかがはじめて聞きく。

「さう、餅屋もちやの姉ねえさんかい……而そして何なんだぜ、あの芝居しばゐの廁へんじよに番ばんをして居ゐる、爺ぢいさんね、大おほどんつくを着きた逞たくましい親仁おやぢだが、影法師かげぼうしのやうに見みえる、太ひどく、よぼけた、」

「えゝ、駕籠傳かごでん、駕籠屋かごやの傳でん五郎ごらうツて、新地しんちの駕籠屋かごやで、ありや其その昔鳴むかしならした男をとこです。最もう年とし紀しの上うへに、身からだ體たを按なげた撫理むりがで出でて、便所べんじよの番ばんをして居ゐます。其その傳でんが？」

「娘むすめの、爺ぢいさんか父親おやぢなんだ。」

此これは男衆をとこしゆじが知しらなかつた。

「へい、」

「知らないのかい。」

「然うかも知れませんが、私あ御存じの土地兒ぢやないんですから、見たり、聞いたり、透切だらけで、へい、何うして、貴方？」

「處が分つた事がある。……何しろ、私が、

昨夜あの棧敷へ入つた時、空いて居た場所は、其の私の處と、隣りに一間、」

「然うですよ。」

「其の二間しかなかつたんだ。二丁がカチと入つた時さ。娘を連れて、年配の出方が一人、横手の通の、竹格子下だね、中座のは。……扉がツイと押して、出て来て、小さく成つて、背後の廊下、お極りだ、此の處へ立つ事無用。彼處へ顔だけ出して踞んだもんです。（旦那、此の娘を一人願はれませんか。ござりませうか。内々のもので、客ではござりません。お部屋へ知れますと悪うござりますが、貴下様思召で、）と至つて慇懃です。」

資本は懸らず、恚う云ふ時、おのぼりの氣前を見

「
先^まづ引^ひ受^きけたんだね。」
せるんだ、と思^{おも}つたから、さあ／＼御^ご遠^{えん}慮^りなく、で、

「ずっと前へお出なさい、と云つて勸めても、隅の口に遠慮して、膝に兩袖を重ねて、溢れる八ツ口の、綺麗な友染を、袂へ、手と一所に推込んで、肩を落して坐つて居たがね、・・・可愛らしいぢやないか。赤い紐を緊めて、雪輪に紅梅模様の前垂がけです。

其でも、幕が開いて芝居に身が入つて來ると、身體をもじ／＼、膝を立て、伸上つて――背後に引込んで居るんだから見辛いさね――然うしちや、舞臺を覗込むやうにして居たつけ。つい、知らず／＼乗出して、仕切にひつたりと胸を附けると、人いきれに、ほんのりと臉を染めて、ほつと成つたのが、景氣提灯の下で、恁う、私と先づ顔を並べた。おのぼり心の中に惟へらく、光榮なる哉。

まあ、お聞きつたら。

そりや可かつたが、一件だ。」

「一件と・・・おつしやると？」

「長い、長い。」

「其の娘が、蛇を……嘘でせう。」

「間違つたに違ひない。けれども高津で聞いて、平家の水鳥で居たんだからね。幕間に一寸樂屋へ立違つて、又もとの所へ入らうとすると、其の娘の袂の傍に、紙袋が一つ出て居ます。」

並んで坐ると、其が丁度膝に成らうと云ふんだから、大に怯んだ。何うやら氣の所爲か、むく／＼動きさうに見えるぢやないか。

で、私は後へ引退つた。ト娘の插した簪のひら／＼する、美しい總越しに舞臺の見えるのが、花輪で額縁を取つたやうで、其も可さ。

所へ、さら／＼どか／＼です。荒いのと柔なものと、急ぐのと、入亂れた聲音を立て、七八人。小袖幕で圍つたやうな婦の中から、赫と眞赤な顔をして、瘦せた酒顛童子と云ふ、三分刈の頭で、頬骨の張つた、目のぎよるとした、故か額の暗い、殺氣立つた男が、詰襟の紺の洋服で、靴足袋を長く露した服筒を膝頭にたくし上げた、と云ふ妙な扮装で、其婦たち、鈍太郎殿の手車から轉がり出したやうに、ぬ

つと發奮^{はす}んで出^でて、どしんと、音^{おと}を立て、躍^{をどり}込んだのが、隣^{となり}の棧^{さしき}敷^きで

唐突^{いきなり}、横^{よこ}のめりに兩足^{りやうあし}を投^{なげ}出すと、痛^{いた}いほど、前^{まへ}の仕切^{しきり}にがんと支^ついた肱^{ひぢ}へ、頭^{あたま}を乗^のせて、自分^{じぶん}で頸^{くび}を掴^{つか}んでも、其^そのまゝ仰^{あをむ}向けにぐたりと成^なる、可^いいかね。

顔^{かほ}へ花火^{はなび}のやうに提灯^{ちやうちん}の色^{いろ}がぶツかります。天井^{てんじやう}と舞臺^{ぶたい}を等分^{とうぶん}に睨^{にら}み着^つけて、（何ぢやい！）と一^{ひと}つ怒鳴^{どな}る、と思^{おも}ふと、かつと云^いふ大酒^{おほざけ}の息^{いき}を吐^はきながら、（こら、入^{はい}らんか、）と喚^{わめ}いたんだ。

背後^{うしろ}に、島田^{しまだ}やら、銀杏^{いんげん}返^{がへ}しやら、累^{かさな}つて立^たつた徒^{てあひ}は、右^{みぎ}の旦那^{だんな}よりか、其^その騒^{さわ}ぎだから、皆^{みんな}が見返^{みかへ}る、見物^{けんぶつ}の方^{ほう}へ氣^きを兼ね^かたらしく、顔^{かほ}を見合^{みあ}はせて居^ゐたつけが。

此^この一喝^{かつ}を啖^{くら}ふと、べた／＼と、蹴^け出しも袖^{そで}も崩^{くづ}れて坐^{すわ}つた。

大切^{たいせつ}な客^{きやく}と見^みえて、若衆^{わかしゆ}が一人^{ひとり}、女中^{ぢやちゆう}が二人^{ふたり}、前^{まへ}茶屋^{ぢやや}のだらう、附^ついて來^きた。人數^{にんず}は六人^{にん}だつたがね。旦那^{だんな}が一杯^{ぱい}にのしてるから、何^どうして入^{はい}り切^きれるもんぢやない。随分^{ずぶん}肥^ふつたのも、一人^{ひとり}ならずさ。

茶屋^{ぢやや}のが頻^{しきり}に、小聲^{ここゑ}で詫^{わび}を云^いつて叩頭^{おじぎ}をしたのは、

御勢ごあせいでも此この外ほかに場所ばしよは取とれませんが、と詫わびたんだらう。(構かまひまへんで、お入はりなされ。)
まづい口眞くちまね似ねだ、

初坂はつさかは男衆をとこしうの顔かほを見て微笑ほゝゑんだが、
「然さう云いつて、茶屋ちやの男をとこが、私わたしに言ことばも掛かけないで、
其その中なかでも、就な中醫なかんづくしりの大おほきな大年増おほとしまを一人ひとり、此方こつちの
場所ばしよへ送おくり込んだ。すると又また其その婦をんなが、や、どツこい
しよ、と掛聲かけこゑして、澄すまして、ぬつと入はつて、ふは
りすそと裾埃こみで前まへへ出でて、正せい面めん充じゆ満まんに陣取ぢんとつたらう。」

「娘むすめは此この肥ふと満つちよ女にに、のし／＼隅すみつこへ推おつ着くけられて、可おそろ恐ろしく見み勝が手てが惡わるく成なつた。あゝ可かは哀いさうにと思おもふ。丁ちやうど、其その身からだ體だが、舞ぶ臺たいと私わたしとの中なか垣ぎに成なつたもんだからね。可いぢ憐ぢしいぢやないか

密そつと横よこ顔がほで振ふり向むいて、俯ふし目めに成なつて、(貴あん下たはん、見み憎にくうおますやろう、)と云いつて、極きまりの惡わるさうに目めをばち／＼と瞬またいたんです。何なに事ことも思おもひません。

大おほ阪さか中ちゆうの詫わび言ごとを一人ひとりでされた氣きがしたぜ。」

男をとこ衆しゆうは頭づむりを下さげた。

「御ご道もつ理ともで。」

「いや、眞ま個ごとく。心しん配ぱいしないで樂らくに居ゐて、御ご覽らん々々、と重かさねて云いふと、芝しば居ゐで泣ないたなりの濕しつ乎とした眉まゆを、嬉うれしさうに莞にっこ爾りして、向むかうを向むいたが、一寸ちよつ白とい指ゆびで壓おさへながら、其その花はな簪かんざしを抜ぬいたは何なにうだい。染そめ分わけの總ふさだけでも、目め障ざはりに成なるまいと云もふ、しほらしいんだね。

(酒さけだ、酒さけだ。疾はやくせい、のろま!)ときつくり、と胸むねを張はり反そらして、目めを剥むく。此こ奴いつが、どろんと濁にご

つて血走つてら。ぐしや／＼見上げ皺が揉上つて筋だらけ。其の癖、すぺりと髭のない、まだ三十くらゐ、若いんです。

（はい／＼、唯た今、直きに、）とひよこ／＼と敷居に捺附ける、若衆は叩頭を爲い／＼、（御寮人様、行届きまへん處は、何分、）と、恚う内證で云つた。

其の御寮人と云はれた、・・・旦那の背後に、・・・髪は矢張り銀杏返しだつけ・・・お召の半コオトを着たなりで控へたのが、

「へい、成程、背後に居ました。」

「お珊の方かね、天満橋で見た先刻のだ。尤も東の雑壇をずらりと通して、柳櫻が、色と姿を競つた中にも、一寸はあるまいと思ふ、容色は容色と見たけれども、齒痒いほど氣氣地のない、何て俯の抜けた、と今日より十段も見劣りがしたつて譯は。」

いづれ妾だらう。慰まれものには違ひないが、若い衆も、（御寮人、）と奉つて、何分、旦那を頼む、と云ふ。

取巻きの藝妓たち、三人五人の手前もある。やけに土砂を振掛けても、突張返つた洋服の亡者一個、掌に引丸げて、捌を附けなけりや立ちますまい。

處が不可い。其の騒ぐ事、暴れる事、棧敷へ狼を飼つたやうです。(泣くな、わい等、)と喚く――

君の親方が立女形で満場水を打つたやう、千百の見物が、目も口も頭も肩も、幅の廣い唯一人の幅廣の形に成つて、啜泣きの聲ばかり、誰が持つた手巾も、夜會草の花を晝間見るやうに、ぐつしより萎んで、火影の映るのが血を絞るやうな處だつけ――
(芝居を見て泣く奴があるものかい、や、怪體な！

舞臺でも何を泣えくさるんぢやい。くわツと喧嘩を遣れ、面白くないぞ！ 打殺して見せてくれ。やい、腸を掴みだせ、へん、馬鹿な、)とニヤリと笑ふ。いや、其のね、ニヤリと北叟笑みをする凄さと云つたら。……待てよ、此の御寮人が内證で情人をこしらへる。嫉妬で其の妾の腸を引摺り出す時、吃と、そんな笑ひ方をする男に相違ないと思つた。

「可哀を留めたのは取巻連さ。」

夢中に成つて、芝居を見ながら、旦那が喚くたびに、はつとするさうで、皆が申合はせた形で、ふらりと手を鶯げる。……片手をだよ。……こりや、私の前を塞いだ肥満女も同じく遣つた。其の癖、默然でね、チトもしお靜に、とも言ひ得ない。

すると、旦那です……。馬鹿め、止めました、と言ひながら、片手づきの反身の肩を、御寮人さ、其のお珊の方の胸の處へ突つけて、ぐたりと成つた。……右の片手を逆に伸して、引合せたコオトの襟を引搦んで、何か、自分の胸が窮屈さうに、恚う碗いて、引開けようとしたんだがね、思ふ通りに成らなかつたもんだから、（えゝ）と云ふと、くわと開けた、細い黄金鎖が晃然と光る。帯を搦んで、ぐい、と引いて、婦の膝を、洋服の尻へ搔込んだりと思ふと、もろに凭懸つた奴が、ずる／＼と這つて、其なり眞仰向けさ。傍若無人だ。」

「膝枕をしたもんです。其の野分に、衣紋が崩れて、褌が亂れた。旦那の頭は下搔の褌を裂いた體に、紅入友染の、膝の長襦袢にのめずつて、靴足袋をぬいと二ツ、仕切を空へ突出したと思へ。」

大蛇のやうな躰をかく。・・・妾はいゝなぶりものにされたぢやないか。私は淺ましいと思つた。大人の芝居の棧敷で。

江戸兒だと、見たが可い！野郎がそんな不状すると、其が情人なら簪でも刺殺す・・・金子で賣つた身體だつたら、思切つて、衝と立つて、袖を拂つて歸るんだ。

處を、何うです。其なりに身を任せて、靜として、然も入身にニ娜として居るぢやないか。

掴寄せられた帯も弛んで、結び目のずりりと下つた、扱帯の淺葱は冷たさうに、提灯の明を引いて、寂しく婦の姿を庇ふ。其が切ても思遣りに見えたけれども、其さへ、然うした度の過ぎた酒と色に血の荒びた、神經のとげ／＼した、狼の手で掴出された、青光のする腸のやうに見えて、あはれに無慚な

光景だつけ。」

「へい、然うですかね、」と云つた男衆の聲は、何故か腑に落ちぬらしく聞えたのである。

「聞きや、道成寺を舞つた時、腹巻の下へ蛇を緊めた姉さんだと云ふぢやないか。……其の扱帯が鎌首を擡げりや可かつたのにさ。」

「眞個ですよ。其がために、貴方ね、舞の師匠から、其の道成寺、葵の上など、云ふ執着の深いものは、立方禁制と言渡されて、破門だけは免れたツて、奥行きのある婦ですが……。金子の力で、旦那にや自由に成らないぢやなりませんまいよ。」

「氣の毒だね。」

「とおつしやると、筋も骨も抜けたやうに聞えま
ずけれど、其の癖、随分、仕たい三昧、我儘をする
のを、旦那の方で制し切れないツて、評判をします
がね。」

「金子で其の我まゝをさせて貰ふだけに、又旦那にも棧敷で帯を解かれるやうな我臚をされるんです。身體を賣つて榮耀榮華さ、其が淺ましいと云ふんぢやないか。」

「ですがね、」

と男衆は、雪駄ちやら／＼、で、日南の横顔、小首を捻つて、

「我儘も品によりませ。金剛石や黄金鎖なら妾の身ぢや、我儘と云ふ申立てにもなりませんかね。」

白動車のブウ／＼も血の道に觸るか何かで、或時なんざ、奴の日傘で、青葉時に、それ女大名の信長公でさ。鳴かずんば鳴かして見せう、日中に時鳥を聞くんだ、と云ふ觸込みで、天王寺へ練込みましたさ、貴方。

幫間が先へ廻つて、あの五重の塔の天邊へ上つて、わな／＼震へながら雲雀笛をピイ、は何うです。

そんな我儘より、最つと偉いのは、然も其の日だつて云ふんですがね。

御堂横から蓮の池へ廻る廣場、大銀杏の根方に筵

を敷いて、すとんと、すとんと、と太鼓を敲いて、
猿を踊らして居た小僧を、御寮人お珊の方、扇子を
半開か何かで、恚う反身で見ると、（可愛らしいば
んちやな。）で、俳優の誰とかににてるツて御意の
上……（私は人の妾やよつて、えらい相違も
ないやろけれど、畜生に世話に成るより、些とは優
や。旦那に頼んで出世させて上げる、來なはれ、）
と直ぐに貴方。

其の場から連れて戻つて、否應なしに、旦那を説付
けて、忽ち大店の手代分。大道稼ぎの猿廻しを、縞
もの揃ひにきちんと取立てたなんぞは如何で。私は
膝を突つく腕に、些とは實があると思ふんですが。」

初阪は此を聞くと、様子が違つて、

「さあ、事だよ！　すると、昨夜のは其の猿廻し
だ。」

「いや、黒服くろふくの狂犬やまいぬは、まだ妾めかけの膝枕ひざまくらで、ふんぞり返かへつて高躰たかいびき。其それさへ見みては居あられないのに、・・・其その手代てだいに違ちがひない。・・・・・當時たうじの久松ひさまつと云いつたのが、前垂まへたれがけで、何か急用きふようと見みえて、逢あひに來きてからの狼籍らうぜきが、眞個まっこう目に餘あまつたんだ。

悪口吐あくこうつくのに、（猿曳ざるひきめ、）と云いつたが、其それで分わかつた。けづり廻まはしとか、摺古木すりこぎとか、獸けだものめとか云いふ事ことだらう。大阪おほさかでは（猿曳ざるひき）と怒鳴どなるのかと思おもつたが。ぢや、其そのお珊さんの方かたが取立とりたてた、銀杏いんげいの下したの藝げい人にんに疑うたがひない。

と成なると！・・・・・あの、婦をんなは尚なほ濟すまないぜ。自分じぶんの世話せわをした若手代わかてだいが、目めの前まへで、額ひたいを煙管きせるで打ぶたれるのを、もぢ／＼と見みて居あたらうぢやないか。」

「煙管きせるで、へい？」

「

「あゝ、垂たらし々と血ちが出でた。其それを何どうにも爲し得えないんだ。ぢや、天王寺てんわうじの境内けいだいで、猿曳ざるひきを拾ひろ上げたつて

何の功にもなりやしない。

まあね、……旦那は寐たらう。取巻きの藝妓一統、互にほつとしたらしい。が、私に言はせりや其の徒だつて働きがないぢやないか。何のための取巻なんです。此處は腕があると、取仕切つて、御寮人に樂をさせる處さね。其の柔かい膝に、友染も露出に成るまで、石頭の拷問に掛けて、芝居で泣いて居ては濟みさうもないんだが。

可しさ、其も。

唯、其處へ、酒肴、水菓子を添へて運んで来た。

するとね、圓鬚に結つた仲居らしいのが、世話をして、御連中、いづれもお一ツづゝは、いゝ氣なもんです。

さすがに、御寮人は、頭を一寸振つて受けなかつた。

其にも構はず……（さあ一ツ。）か何かで、美濃から近江、此方の棧敷に溢れてる大きなお臀を、隣から手を伸して猪口の縁でコト／＼と音信れると、片手で簪を撮んで、ごし／＼と鬢の毛を突掻き突掻き、ぐしやりと挫げたやうに仕切に凭れて、乗出し

て舞臺を見い見い、片手を背後へ伸ばして、猪口を引傾けたまゝ受ける、注ぐ、それ、溢す。(わやゝない)と云ふ。

其奴が、私の胸の前で、手と手を千鳥がけに始つたんだから驚くだらう。御免も失禮も、會釋一つするんぢやない。

しかし憎くはなかつたぜ。君の親方が舞臺に出て居て、皆が夢中で遣る事なんだ。

憎いのは一人狂犬さ。

漸つと静まつたと思ふ間もない。

(酒か、)と喚くと、むく／＼と起かゝつて、引擔ぐやうな肱の上へ、妾の膝へ頭を載せた。

(注げ！ 馬鹿めが、)と猪口を叱つて、茶碗で、苦い顔して、がぶ／＼と搔喫ふ處へ、
．．．．色
の白い、些と繊弱い、と云つた柄さ。中脊の若いのが、縞の羽織で、廊下をちよこ／＼と来て、ト手をちやんと支いた。

(何や、)と一ツ突慳貪に云つて睨みつけたが、低聲で、若いのが何か口上を云ふのを、フー／＼と

鼻で呼吸をしながら、目を瞑つて、眞仰向けに聞いたもんです。

(旦那の、)旦那と云ふんだ。(旦那の此處に居るのが何ないして知れた、何や、)と又怒鳴つて、(判然ぬかしをれ。何や？ 番頭が 呸、呸、呸、ふん、)と嘲けるやうな、あの、凄可笑顔。やがて、苦々しさうに、而して切なさうに、眉を顰めて、唇を引結ぶと、グウ／＼と又鼻を掻出す。

いや、しばらく起きない。

若手代は、膝へ手を支いたなり、中腰でね、恚う困つたらしく俯向いたツ切。女連は、芝居に身が入つて言も掛けず。

其の中に幕が閉つた。

満場わつと鳴つて、ぎつしり詰つたのが、眞黒に兩方の廊下へ溢れる。

しばらくして、大分鎮まつた時だつた。幕あきにももなさうで、急足に成る往來の中を、又竹の扉からひよいと出たのは、娘を世話した男衆でね。手

に辨當べんたうを一つ持もつて居ゐました。

（はいよ、お辨當べんたう、）と云いつて、娘むすめに差出さしたして、渡わた

さうとしたつげが」

其處に私も居る、……知らぬ間に肥満女の
 込入つたのと、振り向いた娘の顔とを等分に見較べて
 (和女、極が悪いやろ。そしたら私が方へ来て食
 りなはるか。あゝ、然うしなはれ、)と莞爾々々笑
 ふ、氣の可い男さ。(太い邪魔にござります。)
 と、屈んで私に挨拶して、一人で合點して辨當を持
 つたまゝ、づいと引退つた。

「娘がね、仕切に手を支くと、向直つて、抜いた
 花簪を載せて居る、涙に濡れた、細り疊んだ手拭を
 置いた、友染の前垂の膝を浮かして、一寸考へるや
 うにしたつけ。其の手拭を軽く持つて、上氣した襟
 のあたりを二つ三つ煽ぎながら、可愛い足袋で、腰
 を据ゑて、すつと出て行く。

私は煙草がなく成つたから、背後の運動場へ買ひ
 に出た。

餘り見兼ねたから、背後向きに成つて居たがね、
 出しなに見ると、狂犬は其のまゝ膝枕で、例の躰で、

若い手代は何處へ立つたか居なかつた。

西の運動場には、店が一つしかない。最う幕が開く處、見物は残らず場所へ坐直して居る、此處等は大阪は行儀が可いよ。其に、大入で、身の入つた芝居ほど、運動場は寂しいもんです。

風は冷し、呼吸ぬき旁、買つた敷島を其處で吸附けて、喫かしながら、堅い薄縁の板の上を、足袋の裏冷々と、快い心持で、迂らして、懐手で、一人で棧敷へ歸つて來ると、斜達に薄暗い便所が見えます。其のね、手水鉢の前に、大な影法師見るやうに、脚榻に腰を掛けて、綿の厚い寝ン寝子で踞つてるのが、何だつけ、君が云つた、其の傳五郎。」

「ぼけましたよ、え、衾婆氣な駕籠屋でした。」

「眞個だね、股引の裾をぐい、と端折つた處は豪勢だが、下腹がこけて、どんつくの壓に打たれて、猫背にへた／＼と滅入込んで、臍から頭が生えたやうです。」

十四五改も、堆く懐に疊んで持つた手拭は、汚れ

ては居らないが、其の風だから手拭きに出してくれ
るのが、鼻紙の配分をするやうさね、潰れた古無盡
の帳面の亡者に肖如。

一度、前幕のはじめに行つて、手を洗つた時、然
う思つた。

小さな銀貨を一個握らせると、両手で、頭の上へ
押頂いて、(澤山に難有、難有、難有、)と懐中へ
頭を突込んで禮をするのが、何となく、ものゝ可哀
が身に染みた。

其の爺さんがね、見ると……其時、角兵衛
と云ふ風で、頭を動かす……坐睡りか、と思
ふと悶いたんだ。仰向けに反つて、両手の握拳で、
肩を敲かうとするが、ひツつるばかりで手が動かぬ。
うん、と云ふ。

呀、老人の早打肩。危いと思つた時、幕あきの鳴
ものが、チャンと入つて、下座の三味線が、ト手首
を口へ取つて、濕をくれたのが、ちらりと見える。

何處か、もの蔭から、はら／＼と走つて出たのは
其の娘で。

突然、爺様の背中へ掴まると、手水鉢の傍に、南
天の實の繞々と、窟に伏さつた冷い緋鹿子、眞白な
小腕で、どんつくの肩をたたくぢやないか。

青苔の緑青がぶく／＼禿げた、濕つた貼の香のぶ
んとする、山の書割の立て掛けてある暗い處へ凭懸
つて、あゝ、さすがに此處も都だ、と頻に可懐く熟
と視た。

代 ー ー 君が云ふ、其の美少年の猿廻。
其處へ、手水鉢へ来て、手を洗つたのが、若い手
「

急いで手拭を懐中へ突込むと、若手代は其處等頻りに前後を二した、
私は書割の山の陰に潜んで居たらう。

誰も居ないと見定めると、直ぐに、娘をわきへ推遣つて、手代が自分で、爺様の肩を敲き出した。
二人はいゝ中で居るらしい、一目見て様子で知れる、

「ほう、」

と唐突に聲を揚げて、男衆は小溝を一つ向うへ跳んだ。初阪は小さな石橋を渡つた時。

「私は旅行をした效があると思つた。」

聲は届かないけれども、趣でよく分る。．．．．．
両手を働かせながら、若手代は、顔で教へて、此處は可い、自分が介抱するから、彼方へ行つて芝居を見るやうに、と勧めるんです。娘が肯かないのを、優しく叱るらしく見えると、あい／＼と頷く風でね、老年を二る男の深切を、嬉しさうに、二三度見返りながら、娘はいそ／＼と棧敷へ歸る。其の竹の扉を

出る時、一寸襟を合せましたよ。

私も歸つた。

間もなく、何、然したる事でもなかつたらう。す
ぐに肩癢は解れた、と見えて、若い人は、隣の棧敷
際へ戻つて来て、廊下へ支膝、以前の如し。

眞中へ挟つた私を御覽。美しい絹絲で、身體中かゞ
られる、何だか軽い氣持に胸が緊つて、妙に窮屈な
事と云つたらない。

狂犬がむつくり、鼻息を吹直した。

（柿があるか、剥けやい、）と涎で滑々した口を
切つて、絹も膚にくひ込まう、長い間枕した、妾の
膝で、眞赤な目をニくと、手代をじろり、然も輕蔑
したやうに見て、（何しとる？ 汝や！）と口汚
く、先づ怒鳴つた。

（何ぢや、返事を待つた、間抜け。勘定欲しい、と
取りに来た金子なら、拂うて遣るは知れた事や。何
吐す。．．．．．三百や五百の金。うんも、すんも
あるものかい、鼻かんで敲きつける、と番頭に然う
吐かせ。）

（はい、）と、手を支く。

（早々と去ね、こない場所へのこ／＼と面出しを
つて、何さらす、去ねやい。）

（はい、）と其でも用済み。前垂の下で手を揉み
ながら、手代が立つて、五足ばかり行きかゝると、
（多一、多一、）と呼んだ。若い人は、多一と云ふ
んだ。

（待てい、）と云ふ。はつと引返して、又手を支
くと、婦の膝をはらばひに乗出して、（何ぢやな、
向うから金子くれい、と使が来て店で待つぢやな。
人寄越いたら催促やい。誰や思ふ、丸官、）と云つ
たやうに覺えて居る。

「え、丸田官藏、船場の大金持です。」

「然うかね、（丸官は催促されて金子出した覺え
はない。へ、ん、）と云つて、取巻の藝妓徒の顔を
づらりと見渡すと、例の凄いので嘲笑つて、軍鷲が
蹴つけるやうに、ボンと起きたが、（寄越せ、）で、

ひとりむ一人剥いて居た柿を引手繰る、と仕切に肱を立て、顔を、新高に居る何處かの島田鬚の上に出出して、丸啗りに、ぼり／＼と喰かきながら、（留め了へ、）と舞臺へ喚く。

御寮人は、ぞろりと襦を引合わせる。多一は、其の袖の蔭に、踞つて居たんだね。

するとね、くひほじつた柿の核を、ぴよい／＼と棧敷中へ吐散らして、あはゝ、あはゝ、と面相の崩れるばかり、大口を開いて笑つたつけ。

（鐵砲打て、戦争押始める。大砲でも放さんかい、陰氣な芝居や、馬鹿、）と云ふと、又急に、険しい、苦い、尖つた顔をして、じろりと多一を睨みつけた。

（何しとる、うむ、）と押潰すやうに云ひます。

（それでは、番頭さんに、其の通り申聞けますでございませう、）と又立つて、多一が歩行き出すと

（こら！）と呼んで呼び留めた。

（丁稚々々、）と今度は云ふのさ。

聞く男衆は欺息した。

「難物ですなあ。」

「其からの狂犬が、條理違ひの難題と云つちや、
聞いて居られなかつたぜ。」

（汝や、はい／＼で、用を濟ました顔色で、人間
並に棧敷裏を足ばかりで立つて行くが、歸つたら番
頭に何と云うて返事さらすんや。何や！ 拂ふな、
と俺が吩咐けたから其の通り申します、と申します
が、呆れるわい、これ、拂ふべき金子を拂はいで、
主人の一分が立つと思ふか。（五百圓や三百圓、）
と大な聲して、（端金子、）で、底力を入れて塗り
つけるやうに聲を密めて……（喃、端金子を、
あゝも憊うもあるものかい。俺が拂ふな、と云うた
かて拂へ。さつさと一束にして突付ける。歸れ！
大白癡、其の位な事が分らんか。
で、又追立てゝ、立掛ける、と又しても、（待ち
をれ。）だ。
（分つたか、何、分つた、偉い！ 出來す、）と
云つてね、ふん、と例の厭な笑方をして、それ、
直ぐに藝妓連の顔をぎよるり。

分つたら言うて見い、歸つて何と返事をする、饒舌れ。一應は聞いて置く。丸官後學のために承りた、ふん、）と鼻を仰向けに耳を多一に突附けて、其處にありあはせた、御寮人の黄金煙管を握つて、立續けに、ふか／＼吹かす。

（判然言へ、判然、ちやんと口上を以つて吐かせ。うん、番頭に、番頭に、番頭に、何だ、金子を拂へ？・・・黙れ！沙汰過ぎた青二才、）と可恐い顔に成つた。（誰が？）と吠えるやうな聲で、（誰か拂へと言つた。誰が、これ、五百圓は大金だぞ！

丸官、たかを聞いてさへぶる／＼する。これ、此の通り震へるわい。）で、胴肩を一つに揺り上げて、（大膽ものめが、土性骨の太い奴や。主人のものだとたかを括つて、大金を何の糟とも思ひくさらん、乞食を忘れたか。）と言ふ。

目に涙を一杯ためて、（御免下さいまし、）と、退つて廊下へ手を支くと、（あやまるに及ばん、よ

く、考へて、何と計らふべきか、其處へくひ附いて
分別して返答せい。・・・石に成るまで、汝や
動くな。）と又柿を引手繰つて、かつ／＼と喰ひか
きなながら、（止め了へ、馬鹿、）と舞臺へ怒鳴る。

（旦那様、旦那様、）と多一が震聲で呼んだと思
へ。

（早いな、汝がやうな下根な奴には、三年かゝら
うと思うた分別が、立處は偉い。俺を呼ぶからには
工夫が着いたな。先づ、褒美を遣る。そりや頂け、
と柿の蒂を、色白な多一の頬へたゝきつけた。

（もし、御寮人様、）と熟と顔を見て、（何うし
ましたら宜しいのでございませう、）と継るやうに
して言つたか言はぬに、（猿曳め、汝や、婦
に、・・・畜生、と喚くが疾いか、伸掛つて、
ピシリと雁首で額を打つたよ。羅宇が眞中から折れ
た。

此方の棧敷に居た娘が、誰より先に、ハツと仕切

へ顔を伏せる、と氣を打たれたか、驚いた顔をして、新高の、丁ど下に居た一人商人風の男が、中腰に立つて上を見た。

藝妓達も一時に振り向いて目を合せた、が、其だけさ。多一が壓へた手の指から、たら／＼と絲すぢのやうに血の流れるのを見たばかり、何うにも手のつげやうがなさ／＼うな容子には弱つたね。お剩に知らない振をして、其のまゝで芝居を見る姉さんがあるぢやないか。

私は、ふいと立つて、部屋へ歸つた。

傍に居ちや、最う此方が撮出されるまでも、横面一ツ打挫がなくツては、新橋へ歸られまい。が、私が取組合つた、と成ると、随分舞臺から飛んで來かねない友だちが一人居るんだからね。

頭痛がする、と樂屋へ横に成つたツ切、あとの事は知れません。道頓堀で、別に半鐘を打たなかつたから、あれなり、ぐしゃ／＼と消えたんだらう。

其その婦をんなだ、呆あきれたぐうたらだと思おもつたが、
「もし、もし、」
と男衆をとこじゆが、初阪はつさかの袖そでを、ぐい、と引ひいた。

歩あ行くともなく話はなしながらも、男をとこの足あしは早はやかつた。唯と見ると、二ふたり人から十四五間、眞直まつすぐに見渡みわたす。――狭せまいが、群集ぐんじゆの夥おびたしい町筋まちすぢを、斜なめに奴やつこを連つれて通とほる。――二ふたつ個、前後あとさきにすつと並ならんだ薄色うすいろの洋傘かうもりは、大輪たいりんの芙蓉ふようの太陽ひを浴あびて、冷つめたく輝かくが如ごとくに見みえた。

水打みづうつた地つちに、裳もすその綾あやの影かげも射さす、色いろは四邊あたりを拂はらつたのである。

「やあ、居ゐる」

と、思おもはず初阪はつさかが聲こゑを立てる、ト兩側りやうがはを詰つめた屋や毎との店みせ、累かさなり合あつて露店ろてんもあり。軒のきにも、路みちにも、透すきま間まのない人立ひとたちしたが、いづれも言合いひあはせたり、其その後姿つしうすがたを見送みおくつて居ゐたらしいから、一見けん赤毛布あかけつとの其その風采ふうさいで、慌あわしく（居ゐる、）と云いへば、件くだんの婦をんなに吃驚びつくりした事ことは、往來ゆきの人の、近間ちかまなものには残のこらず分わかつた。

意氣いきな案内者あんないしや大おほに弱よわつて、

「驚いては不可ません。天満の青物市です。それ、眞正面に、御鳥居を御覽なさい。」

はじめて心付くと、先刻視めた城に對して、稜威は高し、宮居の屋根。雲に連なる蕨の棟は、玉を刻んだ峰である。

向つて鳥居から町一筋、朝市の濟んだあと、日蔽の葦簀を拂つた、兩側の組柱は、鐵橋の木賃に似て、男も婦も、折から市人の服装は皆黒いのに、一ツ鮮麗に行く美人の姿のために、宛然、市松障子の屋臺した、菊の花壇の如くに見えた。

「音に聞いた天満の市へ、突然入つたから驚いたんです。」

「然うでせう。」
「擦違つた人は、初阪の顔を見て皆笑を含む。兩人は苦笑した。」

「ほつこり、暖い、暖い。」
「蒸芋の湯氣の中に、紺の鯉口した女房が、ぬつくりと立つて呼ぶ。」

「おでんや、おでん！」

「餛飩あがんなはらんか、餛飩。」

「煎餅買ひなはれ、買ひなはれ。」

「鮨の香氣が芬として、あるが中に、硝子戸越の

紅は、住吉の浦の綱、淡路島のの蝦であらう。市場

の人の紺足袋に、はら／＼と散つた青い菜は、皆天

王寺の蕪と見た。・・・頬被したお百姓、空籠

荷うて行違ふ。

軒より高い競賣もある。

傘さした飴屋の前で、奥深い白木の階に、二人先

づ、帽子を手に取つた時であつた。――前途へ、

今大鳥居を潜るよと見た、見る目も彩な、お珊瑚の姿

が、其までは、よわ／＼と氣病の床を小春日和に、

庭下駄がけで、我が別荘の背戸へ出たやう、扱帯で

襷取らぬばかりに、日本の本の東西に唯二つの市の中

を、徐々と拾つたのが、忽ち電の如く、颯と、照々

とある圓柱に影を残して、鳥居際から衝と左へ切れ

た。

が、目にも留まらぬばかり、搔消すが如くに見え

なく成つた。

高く競賣店が居る、古いが、黒くがつしりした屋
根越の其方の空、一點の雲もなく、冴えた水色の隈
なき中に、淺黄や、樺や、朱や、青や、色づき初め
た銀杏の梢に、風の戦ぐ、と視めたのは、皆見世も
のゝ立幟。

太鼓に、鉦に、犇々と、打寄する躰音の、速巻き
めいて、遙に淀川にも響くと聞きしは、誓文拂ひに
出盛る人数。お珊も暮るれば練ると云ふ、寶の市の
夜をかけた、大阪中の賑ひである。

「御覽なさい、此が龜の池です。」
 と云ふ、男衆の目は、――こゝに人を渡すため
 に架けたと云ふより、築山の景色に刻んだやうな、
 天満宮の境内を左へ入つて、池を渡る橋の上で――
 池は視ないで、向う岸へ外れた。

階を昇つて跪いた時、言ひ知らぬ神靈に、引緊つ
 た身の、拍手も堅く附着たのが、此處まで退出て、
 漸と掌の開くを覚えながら、岸に、其のお珊のイん
 だのを見たのであつた。
 駄でも投げたか、奴と二人で、同じ状に洋傘を傾
 けて、熟と池の面を見入つて居る。

初阪は、不思議な物語に傳へる類の、同じ百里の
 旅人である。天満の橋を渡る時、ふと何處ともなく
 立顯れた、世にも凄いまで美しい婦の手から、一通
 玉章を秘めた文箱を託つて來て、此なる池で、嘗て
 暗示された、別な美人が受取りに出たやうな氣がし
 て成らぬ。

然も其は、途中互にも言ふにさへ、聲の疲れ
た・・・・・激しい人の波を泳で来た、殷賑、心齊
橋、高麗橋と相並ぶ、天満の町筋を徹してゝあるに
も係はらず、説き難き一種寂寞の感が身に迫つた。
参詣群集、隙間のない、宮、社の、フトした空地は、
恚うした水ある處に、思ひかけぬ寂しさを、日中は
分けて見る事がをり／＼ある。

丁ど池の邊には、此の時、他に人影も見えなかつ
た。・・・・・橋の上に小兒を連れた乳母が居た
が、此方から連立つて、二人が行掛つた機會に、
「さあ、のゝ様の方へ行こか。」と云つて、手
を引いて、宮の方へ徐々歸つた。其の状が、人間界
へ立歸る如くに見えた。

池は小さくて、武藏野の埴生の小屋が今あらば、
其の撩ばかりだけれども、深翠に萌黄を累ねた、水
の古さに藻が暗く、取廻はした石垣も、草は枯れつゝ
苔滑。牡丹を彫らぬ欄干も、巖を削つた趣がある。
剩へ、水底に主が棲む・・・・・其の逸するのを封
ずるために、雲に結へて鐵の網を張り詰めたやうに、

ひやくせん 二まか かげ さよなみた
百千の細な影が、漣立つて、ふら／＼と數知れず、
うすくろ いけ なか う
薄黒く池の中に浮いたのは、
かめ いけ な お
龜の池の名に負へる、
みづ みち／＼ かめ
水に充滿た龜なのであつた。

かれはす
枯蓮もばら／＼と、折れた莖に、ト唯一つ留つた
ゆわう しま あかとんぼ
のは、硫黄ヶ島の赤蜻蛉。

ひしひ せ ひら／＼ さん もすそ かげ なび
緋鯉の背は翻々と、お珊の裾の影に靡く。

あ はし そなた
居たのは、つい、橋の其方であつた。

はんえり くろ あし ほ かすか しろ こんのち
半襟は、黒に、蘆の穂が幽に白い、紺地によりが
ほそ かうし めしちりめん まいこそで わざ
らみの細い格子、お召縮緬の一枚小袖、つい故とら
ふだんぎ で き
しいまで、不斷着で出たらしい。コオトも着ない、
はあり いろ はで しぶ そ きはだ
羽織の色が、派手に、澁く、而して際立つて、ばつ
め
と目についた。

かみ つや いろ しろ そ ひときはめ だ
髪 of 艶も、色の白さも、其のために一際目立

いとあり らく なか きらく
つ、ー ー 絲織か、一樂らしい、くすんだ中に、晃々
さ きつぱりした地の藍鼠に、小豆色と
と冴えがある、きつぱりした地の藍鼠に、小豆色と
ちや こん いろ とほ しま らんたつ
茶と紺と、すら／＼と色の通つた縞の亂立。

あをぞら みづ いろ そで せま あゐ あを
蒼空の澄んだのに、水の色が袖に迫つて、藍は青
あじき くれなゐ ちや もえぎ こん むらさき くま そ
に、小豆は紅に、茶は萌黄に、紺は紫の隈を染めて、
あかる なか かげ おび ながじゆばん これ き
明い中に影さすばかり。帯も長襦袢も此に消えて、

山深き處、年古る他に、たゞ其の、すらりと雪を束
ねたのに、霧ながら木の葉に綾なす、虹を取つて、
細く滑かに美しく、肩に掛けて背に捌き、腰に流し
たやうである。汀は水を取廻はして、冷い若木の薄
もみぢ。

光線は白かつた。

其の艶なのが、女の童を従へた風で、奴とイ
 む。・ ・ ・ ・汀に寄つて。 ・ ・ ・ ・流木めいた板
 が一枚、ぶく／＼と浮いて、苔塗れに生簀の蓋のや
 うに見えるのがみつた。日は水を劃つて、其の板の
 上ばかり、たとへば温かさを積重ねた心持にふは
 ー當る。

其へ、ほか／＼と甲を干した、木の葉に交つて青
 錢の散つた状して、大小の龜は十ウ二十、磧の石の
 數々居た。中には輕石の如きが交つて。 ー

いづれ一度は擒と成つて、供養にとて放された、
 が狭い池で、昔賣買をされたと云ふ黒奴の男女を思
 出させる。島、海、澤、藪をかけた集り勢、これほ
 どの數が込合つたら、月には波立ち、暗夜には潜ん
 で、ひそ／＼と身の上話がはじまらう。

故郷なる、何を見るやら、向は違つても一つ／＼、
 首を据ゑて目をニる。が、人も、もの言はず、活も
 のが此だけ居て餘りの静かさ。孰かゞ幽に、えへん、
 と咳拂をしさうで寂しい。

一頭、ぬつと、ざら／＼な首を伸ばして、長く反つて、汀を仰いだのがあつた。心は、初阪等二人と齊しく、絹糸の虹を視めたに違ひない。

「氣味の悪いもんですね、よく見ると如何にも頭つきが似て居ますぜ。」

男衆は兩手を池の上へ出しながら、橋の欄干に凭れて低聲で云ふ。敢て忍音には及ばぬ事を。雖然、……こゝで云ふのは、直に話すほど、間近な人に皆聞える。

「眞個、魚ぢや緇の面色か瓜二つだよ。」

其の何に似て居るかは言はずとも知れよいづ。

「あゝ／＼、板の下から潜出して、一つ水の中から顯れたのがあります。大分大きうがすせ。」

成程、たら／＼と漆のやうな腹を正的に、甲に詰色の薄紅をさしたのが、仰向けに鰓を此方へ、むつくりとして、而して頭の尖に、黄色く輪取つた、其の目が凸にくるりと見えて、鱗のざらめく蒼味がか

つた手を、ト枚の縁へ突張つて、水から半分ぬい、と出た。

「大將、甲羅干しに枚へ出る氣だ。それ乗ります。」

と男衆の云つた時、爪が外れて、ストンと落ちた。が、直ぐに、すぼりと胸を浮かす。

「今度は乗るぜ。」

やがて、甲羅を、残らず藻の上へ水から驢して踏張つた。が、力足らず、乗出した勢が餘つて、取外づすと、づんと沈む。

「や、不可い。」

忽ち猛然として又浮いた。

で、のしり、のしりと板へ手をかけ、見るも不器用に、堅い體を伸上げる。

「しつかりノ、今度は大丈夫。あ、又につた。大事な處で。」と男衆は胸を乗出す。

汀のお珊は、襖をすらりと足を一寸踏替へた。奴島田は、洋傘を疊んで支いて、直ぐ目の下を、前髪

に手庇して覗込む。

此の度は、場處を替へようとするらしい。

斜に甲羅を、板に添つて、手を掛けながら、する／＼と泳ぐ。此が、棹で操るが如くに成つて、夥多の可心持に乾いた龜の子を、カラ／＼と載せたまゝで、水をゆら／＼と流れていじつた。が、熟として噓したものの一ひとつない。

板の一方は細いのである。

其處へ、手を伸ばすと、腹へ抱込めさうに見えた。いや、困つた事は、重量に壓されて、板が引傾いたゝめに、だふん、と潜る。

「ほい、了つた。いや、串戯ぢやない。

しつかり頼むぜ。」

と、男衆は欄干をトン／＼叩く。

あせる、と見えて、むら／＼と紋が騒ぐ、と月影ばかり藻が分れて、端を探り／＼手が掛つた。と思ふと、ずぼりと出で。

「蛙だと青柳硯と云ふんです。」

「眞個さ。」

「雖然、其の時も爲遂げなかつた。」

「あゝ、惜い。」

男衆も共に、唯一息と思ふ處で、龜の、どぶりと沈む毎に、思はず聲を掛けて、手のものを落す心地で。

「執念深いもんですね。」

「あれ迄にしたんだ、揚げて遣りたい。が、最う弱つたかな。」

と言ふ間もなかつた。

此の時は、手の鱗も逆立つまで、しやつきりと、爪を大きく開ける、と甲の揺ぐばかり力が入つて、其の手を扁平く板について、白く乾いた小さな龜の背に掛けた。

「はゝあ、考へた。」

「此奴を力に取つて伸上るんです、や、や、どツこい。やれ情ない。」

ざぶりと他愛なく、また 又もや沈む。

男衆が時計を視た。

「最う二時半です、これから中の島を廻るんですから、徐々歸りませう。」

「しかし、何だか、揚るのを見ないぢや氣が残るやうだね。」

「え、私も氣に成りますがね、だつて、日が暮れるまで掛るかも知れませんか。」

「妙に残惜いやうだよ。」

男衆は、汀の婦に一寸目を遣つて、密と片頬笑して聲を潜めた。

「串戯ぢやありませんぜ。ね、それ、何だか薄りと美しい五色の荔が、冷々と掛るやうです。・・・變に凄いやうですぜ。龜が昇天するのも知れませんか。故に上ると、其の橋會に、黒雲を捲起して、

震動雷電

「

「さあ、出掛けよう。」

二人は肩を寒くして、コト／＼と橋の中央から取つて返す。

やがて、渡果てようとした時である。

「一寸、一寸。」

と背後から、優しいが張のある、朗かな、而して幅のある聲して呼んだ。何等の仔細なしには濟むまいと思つた半日。それ／＼、言はぬ事か、それ言はぬ事か。

袖を合せて、前後に、ト齊しく振返ると、洋傘は疊んで、其は奴に持たした。縫毛一條もない黒髪は、取つて捌いたかと思ふばかり、瘦ぎすな、透通るやうな頬を包んで、正面に顔を合せた、襟は嚙、雪なす咽喉が細かつた。

「手前どもで、」と男衆は如才ない會釋をする。奴は黙つて、片手を其の膝のあたりへ下げた。

「然うです。」と判然云つて莞爾する、瞼に薄く色が染まつて、類なき紅葉の中の倂である。

「一遍お待ちやす・・・思を遂げんと氣がゝりなよつて、見て居ておくれやす。私が手傳ふさかいな。」

猶豫ためらひあへず、バチンと蓮はすの果みの飛とぶ音が響ひびいた。
お珊さんは帶留おびどめの黄金きん金具かなぐ、緑みどりの照々きら／＼と輝かく玉たまを、鳥羽うば
玉たまの夜よるの帶おびから星ほしを手てに取とるよ、と白魚しらうをの指ゆびに外はづ
して、見得みえもなく、友染いっせんを柔やはらかな膝ひざなりに、腔こしをなよ
／＼と汀みぎはに低ひくく居ゐて　　―　　恰あたかも腹はらを空そらに突張つゝばつて
によいと上あげた、溍もを押分おしわけた　　―　　龜かめの手てに、
縫すがれよ、引ひかむ、とすらりと投なげた。
帶留おびどめは、銀しろがねの曇くもつたやうな打紐うちひもと見みえた。

其その尖さきは水みづに潜くゞつて、龜かめの子こは、ばくりと紐ひもを嚙か
む、ト袖口そでぐちを輕かるく袂たもとを絞しぼつた、小腕こかひなしろ白しろく雪ゆきを伸のべた。
が、重量おもみがかゝるか、引ひく手に幽かすみに脈みやくを打うつ。其その
二ふたの腕うで、顔かほ、襟えり、頸うなじ、膚はだに白しろい處ところは云いふまでもない、
袖そで、褌つまの、艶えんに色いろめく姿すがた、爪尖つまさきまで、―　　宛然さながら、
細ほそい、黒髪くろかみの毛筋けすぢを以もつて、線せんを引ひいて、措そがき取とつ
た姿繪すがたゑのやうであつた。

池の面は、蒼く、お珊瑚の唇のあたりに影を籠めた。
 風少し吹添つて、城ある乾の天暗く、天満宮の屋
 の棟が淀り曇つた。何處ともなく、はた／＼と帆を
 打つ響きは、幟の聲、町には黄なる煙が走らう、數
 萬人の形を掠めて。・・・此の水のある空ばか
 り、雲に硝子を嵌めたる如く、美女の虹の姿は、姿
 見の中に映るかど、五色の絹を透過して、色を染め
 た木の葉は淡く、松の影が颯と濃い。

打紐に又脈を打つて、紫の血が通ふばかり、時に、
 腕の色ながら、じろ／＼と鱗が光つて、其の友染に
 搦んだなりに懷中から一條の蛇の蛻り出た、思ひか
 けず、ものゝ凄じい形に成つた。

「あ、」

と云ふ聲して、手を放すと、蛇の目輝く緑の玉は、
 光を消して、龜の口に銜へたまゝ、するす／＼と水
 脚を引いて其のまゝ底に沈んだのである。

奴はじり／＼と後に退つた。

お珊は汀にすつくと立つた。が、血が留つて、佛は瑪瑙の白さを削つたのであつた。

此の婦が、一念懸けて、爲ると云ふに、誰が何を妨げ得よう。

日も待たず、其の翌の日の夕暮時、寶の市へ練出す前に、――丸官が昨夜芝居で振舞つた、酒の上の暴虐の負債を果させるため、とあつて、――南新地の灘屋の奥二階。金屏風を引繞らした、四海波靜に青疊の八疊で、お珊自分に、雌蝶雄蝶の長柄を取つて、橘活けた床の間の正面に、美少年の多一と、さて、名はお美津と云ふ、逢阪の辻、餅屋の娘を、二人並べて据ゑたのである。

晴の装束は、お珊が金子に飽かして間に合はせた、寶の市の衣裳であつた。

先づ上席のお美津を謂はう。髪は結ひたての水の垂るゝやうな、十六七が潰し島田。前髪をふつくり取つて、兩端へはらりと分けた、遠山の眉にかゝる柳の絲の振分は、大阪に呼んで（いたづら）とか。緋縮緬のかけおろし。橘に寶を抱かせた笄を兩方に、

雲井の薰をたきしめた、鳥帽子、狩衣。朱總の紐は、お珊が手にこそ引結うたれ。着つけは桃に薄霞、朱鷺色絹に白い裏、膚の雪の紅の襲に透くやう媚かしく、白の紗の、其の狩衣を装ひ澄まして、黒縹子の帯、箱文庫。

含羞む臉を染めて、玉の項を差俯向く、ト見ると、雛鶴一羽、松の羽衣搔取つて、曙の雲の上なる、雲に召さるゝ風情がある。

同じ烏帽子、紫の紐を深く、袖を並べて面伏さうな、多一は淺黄紗の素袍着て、白衣の袖を縮ましやかに、膝に兩手を差置いた。

前なるお美津は、小鼓に八雲琴、六人づゝが兩側に、ハオ、イヤ、と拍子を取つて、金時繪に銀鉦打つた欄干づき、輻も漆の車屋臺に、前囃子とて樂を奏する、其の十二人と同じ風俗。

後囃子が、又幕打つた高い屋臺に、これは男の稚兒ばかり、すり鉦に太鼓を合はせて、同じく揃ふ十二人と、多一は同じ装束である。

二人を前に、銚子を控へて、人交ぜもしなかつ

た・
・
・
・
其その時ときお珊さんの装よそほひは、
また立たち勝まさつて目め覺ざま
しや。

寶たからの市いちの一いちの屋臺やたいに付ついて、市女いちめまた姫ひめとも稱となふ
 十二に人の美女びびよが練ねる。

練衣ねりぎね小袷こうちぎの紅くれなゐの袴はかま、とばかりでは言足いひたらぬ。たゞ
 其その上下うへしたを装束さぞくにも、支度したくの夜よるは丑満頃うしみつごろより、女ぢよ
 紅場こうばに顔かほを揃そろへて一人々々ひとり／＼沐浴ゆあみをするが、雪ゆきの膚はだへも、
 白脛しろはぎも、其その湯ゆは一人づゝ紅べにを流ながし、白粉おしろいを汲く替かへ
 る。髪かみを洗あらひ、櫛くしを入いれ、丈たけより長ながく解捌ときさばいて、緑みどり
 の零しづくすら／＼と、香枕かづまくらの香かに霞かすむを待まてば、鷄にはとりの聲こゑ
 數々しば／＼聞きこえて、元結もとゆびに染しむ霜しもの鐘かねの音ね。血ちも潔いさぎよく清きよき
 身みに、唐衣からしごもを着つけ、袴はかまを穿はくと、しら／＼と早はやや旭あさひ
 の影かげが、霧きりを破やぶつて色いろを映うつす。

さて住吉すみよしの朝あさぼらけ、白妙しろたへの松まつの樹この間まを、靜々しづ／＼
 と詣まうで進すすむ、路みちの裳もすそを、臯月さつき御殿ごてん、市いちの式殿しきでんにはじ
 めて解といて、市いちの姫ひめは十二に人ん。袴はかまを十二に長ながく引ひく。

其その市いちの姫ひめ十二に人ん、御殿ごてんの正面しやうめんに揖いつして出いつれば、
 神官しんくわん、威儀ゐぎ正たゞしく彼處かしこにあり。土器かはらけの神酒みき、結むすび昆こ
 布ふ。やがて繪扇ひあふぎを授さづけらる。これを受うけて、席せきに歸かへ

つて、緋や、萌葱や、金銀の縫箔光を放つて、板戸も松の繪の影に、雲白く梢を繞る松林に日の射す中に、一列に並居る時、巫子する／＼と立出で、美女の面一人毎に、式の白粉を施し、紅をさし、墨もて黛を描く、と聞く。

素顔の雪に化粧して、皓齒に紅を濃く含み、神々しく氣高いまで、お珊は爰に、黛さへほんのりと描いて居る。が、女紅場の沐浴に、美しき膚を衆に抽き、解き揃へた黒髪は、夥間の丈を壓へたけれども、一人渠は、住吉の式に連る事をしなかつた。

間際に人が缺けては事が済まぬ。

世話人一同、袴腰を捻返して狼狽へたが、お珊が思ふまゝな金子の力で、身代りの婦が急に立つた。

で、これのみ巫女の手を借りぬ、容色も南地第一人。袴の色の緋よりも冴えた、笹紅の口許に美しく微笑んだ。

「多一さん、美津さん、一寸、どないな氣がおしやす。」

唐織衣からおりころもに思おもひもよらぬ、生地きぢの藝妓げいこで、心易こころやすげに、島臺しまだいを前まへに、聲こゑを掛かける。

素袍すはうの紗しゃに透通すきとおる、燈ともしの影かげに淺葱あさぎとて、月夜つきよに色いろの白しろいやう、多た一いちは照てらされた面色おもてちだつた。

「なあ？」とお珊さんが聞返きこかへす、胸むねを薄うすく數かずを襲かさねた、雪ゆきの深ふかい襲かさねの襟えりに、繪扇ひあふぎを取とつて插さして居ゐた。

「御寮人様ごしれうにんさま。」

と手を下さげて、

「何も、何も、私わたしは申まをされませぬ。あの、たゞ夢ゆめのやうにござります。」と漸やつと云いつて、烏帽子ゑぼしを正ただしく、はじめあげて、女をんなのやうな優やさしい眉まゆの、右みぎを殘のこして斜なめに卷まいたは、笞しもとの疵きずに、無慚むざんな繡帶ほうたい。

お珊さんは黒目勝くろめがちに、熟じつと三みつて、

「眞個ほんに、然さう云いうたら夢ゆめやな。」

と清きよらかな襖ふすまのあたり、座敷ざしきを衝つと三みした。

ト柱はしら、襖ふすま、其その金屏風きんびやうぶに、人ひとの影かげが殘のこらず映うつつた。映うつつて、而そして、緋ひに、紫むらさきに、朱鷲とぎいろ色いろに、二人ふたりの

烏^ゑ帽^{ぼう}子^し、素^す砲^{ぱう}、狩^{かり}衣^{ぎぬ}、彩^{あや}あるまゝに色^{いろ}の影^{かげ}。特^{こと}にお
珊^{さん}の黒^{くろ}髪^{かみ}が、一^{ひと}條^{すぢ}長^{なが}く、横^{よこ}雲^{ぐも}掛^かけて見^みえたのである。

時に、間を隔てた、同じ灘屋の表二階に並んだ座敷は、残らず丸官が借り占めて、同じ宗右衛門町に軒を揃へた、兩側の揚屋と齊しく、毛氈を聯ねた中に、やがて時刻に、爰を出て、一先づ女紅場で列を整へ、先立ちの露拂ひ、十人の稚兒が通り、前離子の屋臺を挟んで、其處に、十二人の姫が續く。第五番に、檜扇取つて練る約束の、我がお珊の、市隨一の曠の姿を見ようため、藝妓、幫間をずらりと並べて、宵からこゝに座を構へた。

が、其の座敷もまだ寂寞して、時々、階子段、廊下などに、遠い跽音、近く床しき衣摺の音のみ聞ゆる。

お珊は袖を開き、居直つて、

「まあな眞個に夢のやうにあるな。私かて、夢かと思ふ。」

と、臆丈けた黛、恍惚と、多一の顔を瞻りながら、「けど、何の、何の夢やおへん。たとひ夢やかで。……丸官はんの方もな、私が身に替へて、

承知させた。．．．三々九度やさかい、あゝした
我まゝな、好勝手な、朝云うた事は晩に變へやはる
人やけど、此ばかりは、私が附いて居るよつて、承
合うて、どないしたかて夢にはせぬ。．．．あ
んじよう思ふておくんなはれや。

美津さん、

と娘の前髪に、瞳を返して、

「不思議な御縁やな。ほゝ、」

手を口許に翳したが、

「恚う云うたかて、多一さんと貴女とは、前世か
ら約束したほど、深い交情でおいでる様子。今更で
はあるまいけれど、私とは不思議な御縁やな。思う
て見れば、一昨日の夜さり、中の芝居で見たまでは
天王寺の常樂會にも、天神様の御縁日にも、つひぞ
出會うた事もなかつたな。

一見で恚う成つた。

貴女な、ようこそ、芝居の裏で、お爺はんの肩摺
つて上げなはつた。多一さんも人目忍んで、貴女の
孝行手傳はゝつた。．．．自分介抱するよつて、
一條など、可愛い可愛い女房はんに、澤山芝居を見

せたい心こころや。又またな、其そのの心こころを汲取くみとつて、鶉うづらへ嬉々いそ／＼お
歸かへりやした、貴女あなたの優やさしい、仇氣あどけない、可愛かほいらし
さも身みに染しみて。

私わたしはな、丸官まるくわんはんに、軌々ぎし／＼と・・・・・四角かくな天あ
窓ま乗のせられて、鶉うづらの仕切しきりも拷問がうもんの柱はしらとやら、膝ひざも骨ほね
も砕くだけるほど、辛つらい苦くるしい堪たがたいへ難なを抱かかり、責苦せめくに逢あふ
やうな中なかでも、身節みぶしも弛ゆるんで、恍惚うつとりするまで視ながめて
居あた。あの・・・・・扉ひらきの、お仕置場しおきばらしい青竹あをだけの
矢來やらいの向むかうに・・・・・貴女等あなたたちの光景やうすをば。――
惡事あくじは虎とらの千里りはし走る、好いい事ことは、花はなの香かほども外そと
へは漏もれぬ言いふけれど、貴女二人あなたふたりは孝行かうかうの徳とく、戀こひの
功てがら、恩愛おんあいの報むくいだすせ。誰たれも知しるまい、私わたし一人ひとり、よう
知しつた。

逢坂あふさかに店みせがある、餅屋もちやの評判ひやうばんのお娘こさん、御兩親おふたおや
は、どちらも行方ゆきがた知れず成なつた、其そのの借錢しゃくせんやら何なにや
らで、苦勞くらうしなはる、あのお爺ぢいさんの孫まこや事ことまで、
人ひとに聞きいて知しつたよつて、不圖ふとな、彼かれや此これや談合だんがふ
よう氣きに成なつたも、私わたしばかりの心こころやない。

天満の天神様へ行た、其の歸途に、つい虚氣々々、
と、最う黄昏や云ふ時を、寄つて見たい氣に成つて、
貴女の餅屋へ土産買ふ振りで入つたら、
と微笑みながら、二人を前に。

「多一さんが、使の間を一寸逢ひに寄つて、町並
灯の點された中に、其店だけは灯もつけぬ、暗いに
島田が黒かつたえ。其のな、繙帯が白う見えた。」

小指を外らして指の輪を、我目の前へ、
お珊は其が縁を結ぶ禁厭であるやうにした。

「密々、話して居やはつたな。……其處へ、
私が行合はせたも、此の杯の瑞祥だすぜ。

こゝで夫婦に成らはつたら、直ぐにな、別に店を出して貰ふなり、世帯持つて其處から本店へ通ふなり、あの、お爺はんと、三人、あんじよ暮らして行かほるやうに、私がちやと引受けた。弟、妹の分にして、丸官はんに否は言はせぬ。よつて、安心おしやすや。え、嬉しいやろ。芙津さんが、あの、嬉しさうなえ。

何うや、九太夫はん。」と云つた、お珊は、密と聲を立てゝ、打解けた笑顔に成つた。

多一は素袍の淺黄を濃く、袖を緊めて、又其の顔を、はツと伏せる。

「ほゝゝ多一さん、貴下、然うむつかしうせずと、胡坐組む氣で、杯しなはれ。私かて、丸官はん

の傍に居るのやない、此の一月は籍のある、宮田屋の以前の藝妓、其のつもりで酌をするのえ。

假祝言や、儀式も作法も預るよつてな。後に又あらためて、歴然とした媒的人立てる。其の媒的人やつたら、此の席でこないな串戯は言へやへん。

然ない極らずと居ておくれやす。なあ、九太夫はん。

「御寮人様。」

と片手を疊へ、

「私は最う何も存じません、胸一杯で、ものも申されぬやうにござります。が、其の九太夫は情なうござります。」

と、術なき中にも、ものゝ嬉しさうな笑を含んだ。

「然やかて、貴方、一昨日の暮方、餅屋の土間

に、．．．．そないして、話して居なはつた處へ、私が、ト行た．．．．姿を見ると、腰掛框の縁の下へ、慌てまうて、潜つて隠れやはつたやないかいな。」

言ふ　　「其は事實であつた。」

「はい、唯今でこそ申します、御寮人様が又お意地の悪い。其の框へ腰をお掛けなされまして、盆にあんころ餅寄せ、茶を持って、此の美津に御意ござります。

其の上、入る穴はなし、貴女様の召しもの薫が、魔薬とやらを嗅ぎますやうで、氣が遠くなりました。其の辛さより、犬に成つてのこ／＼と、下屋を這出もました時が、尚ほ術なうござりましてござります。

「ほ／＼可厭な、此の人は。」

「……最初はな、内證で情婦に逢やはるより、何の餘所の人でないものを、私の姿を見て隠れやはつた心の裡が、水臭いやうにあつて、口惜いと思うたけれど、な、……手を支いて詫言やはる……其の時に、門のとまりに、丁と乗つて、むぐ／＼柿を頬張つて居た、あの、大な猿が、土間へ跳下りて、貴下と一所に、頭を土へ附けたわには、つい、おろ／＼と涙が出たえ。」

柿は、貴下の土産やつたさうに聞くな。

天王寺の境内で、以前舞はしてやった、あの猿。
どな小城つた問うた時、些と知縁のものがあつて、
其の方へ、とばかり言うて、預けた先方を話しなは
らん、住吉邊の田舎へなと思つたら、大切な許に居
るやもの。

おゝ、其なりで、貴方たちを、私が方へ、無理に
連れまうて来て了うたが、うっかりしたな、お爺は
んは、今夜は私の市女笠持つて附いて貰ふよつて、
其も留守。あの、猿は何うしたやろな。」

「はい、」

と娘が引取つた、我が身の姿と、此の場の光景、
踊のさらひに臺辭を云ふやう、細く透る、が聲震へ
て、

「お爺さんが留守の時も、あの、戸を閉めた中に
居て、ような、何時も留守してくれますのえ。」

「飼主とは申しまして、却つて私の方が養れま
した、あの、猿でさへ、」

多一は片手に胸を壓へて、

「御寮人様は申すまでもござりません、大道から
お拾ひ下さりました。……又旦那様の目を盗
みまして、私は實に、畜生にも劣りました、」

「何や 怪我に貴方は何やかて、美津さんは

天人や、其の人の夫やもの。まあ、二人して装束を
お見やす、雛を並べたやうやないか。

けどな、多一さん、貴下な、九太夫やつたり、其
のな、額の疵で、床下から出やはつた處は仁木どす
せ。澤山忠義な家來では執方やかてなさうな。」

と輕口に、奥もなく云うて退けたが、ほんのりと
潤みのある、瞼に淡く影が映した。

「あゝ、わやく云ふ事やない。……貴方、
其の疵、眞個に最う疾痛はないか。こないした嬉し
さに、づき／＼したかて忘れう。けど、疵は刻ん

で消えまいな。私が傍に居たものを。美津さんの大
事な男に、怪我させて濟まなんだな。

然やけど、美津さん、怨みにばかり、思ひやすな。
何百人か人目の前で、打擲されて、熟と堪へて居や
はつたも、辛抱しとげて、貴女と一所に、添遂げた
いばかりなんえ。而したら、男の心中の極印打つた
も同じ事、喜んだかて可いのです。」

お美津は堪へず、目に袖を當てようとした。が、
朱鷺色衣に裏白きは、神の前なる薄紅梅、涙に濡ら
すは勿體なし。緋縮緬を手になら、襦袢は席の亂れ
とて、強ひて堪へた頬の靨に、前髪の艶しと／＼と。

お珊は眦を多一に返して、

「喃、多一さんも然うだすやるな。」

「はい！」と聞返すやうにする。

「丸官はんには、柿の板吹かけられたり、口車に綱
つけて廊下を引摺廻されたり、羅宇のポツキリ折れ
たまで、そないに打擲されやして、死に身に成つて
堪へなはつたも、誰にした辛抱でもない、皆、美津

さんの爲めやるな。」

「なあ、貴方、」

「えゝ、多一さん、新枕の初言葉と、私もこゝで
丁と聞く。……女子は女子同士やよつて、美
津さんの味方して、私が聞きたい。貴方は然うはな
からうけど、男は浮気な……」

と見る、目がばつちりと輝いた。

多一は俯向いて見なかつた。

「ものやさかい、美津さんの後の手券に、
貴方の心を取つて置く。あゝまで堪へやした辛抱は、
皆女子へ、」

「えゝ、」

「あの、美津さんへの心中だてかへ。」
多一はハツと疊に手を……其の素袍、指貫
に、刀なき腰は寂しいものであつた。

「御寮人様、御推量を願ひたうござります。
誓文
それに相違ござりません。」

お美津の両手も、鶴のの白羽の狩衣に、玉を揃へて、前髪摺れに支いて居た、簪の橘薫りもする。

「おゝ 嬉し」

と胸を張つて、思はず、つい云ふ。聲の綾に、我を忘れて、道成寺の一條の眞紅の絲が、鮮麗に織込まれた。

其は禁制の錦であつた。

ふと心付いた状して、動俵を鎮める氣に、襟なる繪扇の端を緊乎と壓へて、卜後を見て、襖にすらり摩いた、其の下げ髪がみの丈たけを視ながめた。

お珊の姿は陰々とした。

夫婦が二人、其の若い顔を上げた時、お珊は何氣なき面色した。

「眞個になあ、くどいやうなが多一さん、よう辛抱しやはつた。中の芝居で、あの事がなかつたら、幾ら私が無理云うたかて、丸官はんに此の視言を承知さす事は得爲んもの。……そりやな、夫婦には成らはつたかて、立行くやうに世帯が出来んと成らんやないか。

通ひ勤めなり、別に資本出すなりと、丸官はんに、應、言はせたも、皆、貴方が、美津さんのために堪へなはつた、心中立一つやな。十年七年の奉公を一度に済ましなはつたも同じ事。

額の疵は、其の烏帽子に、金剛石を飾つたやうな光が映す……お、天晴なお婿はん。

さあ、お嫁はん、お酌せうな。」「と軽く云つたが、艶麗に、然も威儀ある座を正して、

「お蔭。」

で、長柄の銚子に手を添へた。

朱塗の蒔繪の三組は、浪に夕日の影を重ねて、蓬
來の島の松の葉越に、如何にせし、鶴は狩衣の袖を
すくめて、其の盞を取らうとせぬ。

「さ、お受けや。」

と、お珊が二度ばかり勧めたけれども、騷立つら
しい胸の響きに、烏帽子の總の揺るゝのみ。美津は
遣瀬なげに手を控へる。

ト熟と視て、

「おゝ、まだ年の行かぬ、嬰兒はんや。多一は
と、酒事しやはつた覚えがないな。貴女盞を先へ取
るのを遠慮やないか。三々九度は、嫁はんが初手
に受けるが法やけれど、別に儀式だつて視言やない
よつて、何うなと構はん。」

然やつたら多一さん、貴方先へお受けやす。」

「はい、」と齊しく逡巡する。

「何うしやはつたえ。」

「御寮人様、一生に一度の事でござります。逆も
の事に、ものが逆に成りませんやう、矢張り美津か

「ら」

と一寸目を合せた。

「女から、お蓋を頂かして下さりまし。」

「然やかて、含羞で居て取んなはらん。……」

何や、貴方がた、をかしなえ。」

ふと氣色ばんだお珊の状に、座が寂として白けた時、表座敷に、テンテン、と二つ三ツ、音じめの音が響いたのである。

二人は黙つて差俯向く。

お珊は、するりと膝を寄せた。屹として、

「早うおしや！ 邪魔が入ると成らんよつて、私

も直きに女紅場へ行かんと成らんえ。……な、

あの、酌人が不足なかい。」

二人は、せはしげに瞳を合して、頻に目でものを云つて居た。

「もし、」

と多一が急いた聲で、

「御寮人様、此の上に尚ほ罰が當ります。不足やなんの、然やうな事がありました可いものでござり

ますか。御免下さりまし、申しませう。貴女様、其の召しました、兩方のお袂の中が動きます。・・・
・美津は、あの、其が可恐いのでござります。」「
と判然云つた。

唯、頤を檜扇に、白小袖の底を透して、

「此か、」

と投げたやうに言ひながら、衝と、兩手を中へ、袂を探つて、肩をふらりと、なよ／＼と其の唐織の袖を垂れたが、品を崩して、お手玉持つよ、と若々しい、仇氣ない風があつた。

「何や、此の二條の蛇が可恐い云うて? ・・・
兩方とも、言合はせたやうに、貴方二人が、自分たちで、心願掛けたものどつせ。

餅屋の店で逢うた時、多一さん、貴下は此の袋一つ持つて居た。な、買うて来る次手はあつて、一夜祈はあげたけれど、用の間が忙しうて、夜さり高津の蛇穴へ放しに行く隙がない、頼まれて欲しいー、云うて、美津さんに託けう、と其が用で顔見に行かはつた云うたやないか。」「

「美津さんも又、日が暮れたら、高津へ行って放す心やつた云うて、自分でも一筋。同じ袋に入つたのが、二ツ、ちよんと、あの、猿の留木の下に揃へてあつて、——其の時、私に打明けて、二人して言やはつたは、つい一昨日の晩方や。

其も此も、貴方がた、芝居の事があつてから、あんな奉公早う罷めて、すぐにも夫婦に成れるやうにと、身體は兩方別れて居て、言合せはせぬけれど、同じ日、同じ時に、同じ祈を掛けやはる。

蛇も二筋落合うた。

案の定、其の場から、思ひが叶うた、お二人さん。彼處のな、蛇屋に蛇は多けれど、貴方がたの此の二條ほど、験のあつたは外にはないやる。私かて、親はなし、稚い時から勤をした、辛い事、悲しい事、口惜しい事、戀しい事、

と懐手のまゝ、目を二つて、

「死にたいほどの事もあつて……何々の思が遂げたいよつて、貴方二人に類似りたさに、同じ蛇を預つた。今少し、身に付けて居たいよつて、恚

うして置いておくれやす。

貴方、結ぶの神やないか。

けどな、思ひ詰めては、自分の手でも持ったもの。一度、願が叩うた上では、人の袂にあるのさへ、美津さん、婦は、蛇は、可厭らしな！

よう貴女、此を持つまで、多一さんを思やはつた、婦同士や、察せいでか。――袂にあつたら、粗相して落とすと成らん。憂慮なやるさかい、私が恚うするよつて、大事ないえ。」

と袖の中にて手を引けば、内懐の乳のあたり、浪打つやうに膨らみたり。

「婦の急所で壓へて置く。……乳銜へられて、私が死なうと、蓋の影も覗かせぬ。さ、美津さん、先づ、お前に。」

お珊は長柄を丁と取る。

美津は蓋を震へて受けた。

手の震へで滴々と露散る如き酒の霏、蛇の色ならずや、酌参るお珊の手を掛けて燈の影ながら、青白き艶が映つたのである。

はた／＼とお珊が手を拍くと、豫て心得さしてあつたらう。廊下の障子の開く音して、すら／＼と足袋摺に、一間を過ぎて、又靜に此の襖を開けて、

「お召し、」

と其處へ手を支いた、裙模様の振袖は、島田の丈長、舞妓にあらず、家から齊眉いて來て居る奴であつた。

「可いかい。」

「はい。」と言ひさま、はら／＼と小走りに、もとの廊下へ一度出て、其の中庭を角にした、向うの襖をすらりと開けると、閨紅に、翠の夜具。枕頭に又一人、同じ姿の奴が居る。

お珊が黙つて、此方から差覗いて立つたのは、龍田姫のイんで、霜葉の錦の谿深く、夕映えたるを望める光景。居たのが立つて、入つたのと、奴二人の、同じ八尺對扮装。紫の袖、白襟が、紫の袖、白襟が。袖口燃ゆる緋縮緬、ひらりと折目に手を掛けて、きり／＼と左右へ廻して、枕を蔽ふ六枚屏風、表に描いたも、錦葉なるべし、裏に白銀の水が走る。

「彼方へ。」

お珊さんが二人ふたりを導みちびいた時とき、兎角とかくして座ざを立たつた、美
津つが狩衣かりぎぬの袴はかまの裾すそは、膝ひざを露あらは顯はな素足すあしなるに、恐おそろ
しい深山路みやまぢの霜しもを踏ふんで、あやしき神かみの犠に牲へに行ゆ
く……何故なせか疊たぐみに辿たど々くしく、ものあはれに見
えたのである。奴二人やつふたりは姿すがたを隠かくした。

屏風を隔て、此の紅の袴した媒妁人は、花やかに笑つたのである。

一人を褥の上に据ゑて、お珊がやがて、一人を、其あとから閨へ送ると、前のが、屏風の片端から、烏帽子のなりで、するりと抜ける。

下髪であとを追つて、手を取つて、枕頭から送込むと、其處に据ゑたのが、すつと立つて、裾から屏風を抜けて出る。トすぐに續いて、縋つて抱くばかりにして、送込むと、おさへて置いたのが、はら／＼出る。

素袍、狩衣、唐衣、綾と錦の影を交へて、風ある状に、裾袂、追ひつ追はれつ、ひら／＼と立舞ふ情に閨を繞つた。巫山の雲に棧懸れば、名もなき戀の淵あらむ。左、橘、右、櫻、衣の模様の色香を浮かして、水は巴に渦を巻く。

「おほ／＼ほ／＼、」
呼吸も絶ゆげな、なへたやうな美津の背を、屏風

の外そとで抱かへた時とき、お珊さんは、其その花はなやかな笑わらを聞きかしたのである。

好よき機し會まとや思おもひけむ。

廊下らうかに跽音あしおこ、ばた／＼と早はやく刻きんで、羽織袴はおりはかまの、
寶たからの市いちの世話人せわにん一人ひとり、真先まつききに、すつ／＼すつと來くる、
當浪屋たうなみやの女房かみさん、仲居なかゐまじりに、奴やつこが續ついて、向むか
ひの人数にんず。

口々くち／＼に、

「御寮人様ごれうにんさま。」

「お珊様さんさま。」

「女紅場ぢよこうばでは、屋臺やたいの組くみも乗込のりこみました。」

「貴女あなたばかりを待兼まちかねてござります。」

襖ふすまの中なかから、

「車くるまは？」

と静しずかに云いふ。

「綱つなも申し着つけました、」と世話人せわにんが答こたへたのである。

「待たせはせぬえ、大事だいじな處ところへ、何なんや！」
と聲こゑが凜りんとした。

黙つて、すた／＼、一同は廊下を引く。

とばかりあつて、襖をあけた時、今度は美津が閨に隠れて、枕も、袖も見えなんだ。

多一が屏風の外に居て、床の柱の、釣籠の、白
玉
椿の葉の艶より、ぼんやりとした素袍で立つた。

襖がくれの半身で、廊下の後前を熟と視て、人の影もなかつた途端に、振返ると、引寄せた。お珊の脱が頸にかゝると、倒れるやうに、八々と膝を支いた、多一の唇に、俯向きざまに、衝と。――

丸官の座敷を、表に視めて、左右に開いたに立寄りもせず、階子段を颯と下りる、と忽ち門へ姿が出た。

軒を離れて、俥に乗る時、欄干に立つた、丸官、と顔を上下に合すや否や、矢を射るやうな二人曳。あれよ、あれよと云ふばかり、廓の灯に影を散らした、群集はぱつと道を分けた。

寶の市の見物は、此よりして早や宗右衛門町の兩側に、人垣を築いて見送つたのである。

其の年十月十九日、寶の市の最後の夜は、稚兒、
市女、順々に、後壓への消防夫が、篝火赤き女紅場
の庭を離れる時から、屋臺の雛子、姫たちなど、傍
目も觸らぬ婦たちは、然もないが、眞前に神輿を荷
うた白丁はじめ、立傘、市女笠持ちの人足など、頻
りに氣にしては空を視めた。
通り筋の、屋根に、廂に、數々鴉が鳴いたのであ
る。

次第に數が増すと、まざ／＼と、薄月の曇つた空
に、嘴も翼も見えて、やがては、練ものゝ上を飛交
はす。

列が道頓堀に小休みをした時は、立並ぶ芝居の中
の見物さへ、頻りに鴉鳴を聞いた、と後で云ふ。

「宗八、宗八。」

浪屋の表座敷、床の間の正面に、丸田官藏、この成金、何の好みか、例なる詰襟の紺の洋服、高胡坐で、座にある幫間を大音に呼ぶ。

「はッ、」

「き様、逢阪のあんころ餅へ、使者に、後押で駈着けて、今歸つた處ぢやな。」

「御意にござります、へい。」

「何か、直ぐに連れて此へ来る手筈ぢやつた、猿は、留木から落ちて縁の下へ半分身體を突込んで、斃死て居たげに云ふ……嘘でないな。」

「實説正銘にござりまして、へい。餅屋店では、

爺の傳五めに、今夜、貴方様、お珊瑚の方様、」

と額を敲いて、

「即ち、御寮人様、市へお練出しのお供を、お好とあつて承ります。……さて又、名代娘のお美津さんは、御夫婦此に——え、即ち逢阪の辻店は、戸を寄せ掛けた明巢にござります。」

處へ宗八、丸官閣下お使者といたし、車を一散に
乘着けまして、隣家の豆屋の女房立會ひ、戸を押し出
いて見ましたれば、いや、はや、何とも悪食がない
たいた様子、お望みの猿は血を吐いて斃ち果てゝ居
りましたに毛頭相違ござりません。」

「うむ。」

と苦切つて頷きながら、

「多一、あれを聞いたかい、其の通りや。」

と、ぐつと見下ろす。

一座の末に、うら若い新夫婦は、平伏して居たの
である。

此より先、餘り御無體、お待ちや、などゝ、慌し
い婦まじりの聲の中に、丸官の形、猛然と躍上つて、
廊下を鳴らして魔の如く、二人の間へ押寄せた。

襖をどんと突明けると、床の間の白玉椿、怪しき
明星の如き別天地に、こは思ひも掛けず、二人の姿
は、綾の帳にも蔽はれず、指貫やなど、烏帽子の紐
も解かないで、屏風の外に、美津は多一の膝に俯し、

多一は美津の背に額を付けて、五人囃子の雛二個、袖を合せたやうであつた。

揃つて、胸先がキヤ／＼と痛むと云ふ。

「酒啖へ、意氣地なし！」

で、有無を言はず、表二階へ引出された。

欄干の緋の毛氈は似たりしが、今夜は額を破るの

でない。

「練ものを待つ内、退屈ぢや。多一やい、皆への

馳走に猿を舞はいて見せてくれ。恥辱ではない。汝

や、丁稚から飛上つて、今夜から、大阪の旦那の一

人。舊を忘れぬためと云ふ……取立てた主人

の訓戒と思へ。

呼べ、と言へば、婦どもが愚圖々々吐す。新枕は

長鳴鶏の夜があけるまでは待兼ねる。

主従は三世の中ぢや、遠慮なしに閨へ推参に及ん

だ、悪く思ふまいな。汝や、天王寺境内に太鼓たゝ

いて居て、ちよこんと猿負背で、小屋へ歸りがけに、

太夫どのに餅買うて、汝も食ひをつた、行歸りから、

其の娘は馴染ぢやげな。足洗うて、丁稚に成るとて、
右の猿は餅屋へ預けて、現に猿ヶ餅と云ふこと、こゝ
に居る婦どもが知つた中。

田畝の鼠が、蝙蝠になつた、其の素砲ひらつかい
たかて、今更隠すには當らぬやて。

却つて卑怯ぢや。

遣つてくれい。

が、聞く通り、ちやと早手廻しに使者を立てた、

宗八が歸つての口上、あの通り。

残念な、猿太夫は斃ちたとあるわい。

唄なと歌へ、形なと見せをれ。

何吐す、

と、とりなしを云つた二三人の年増の藝妓を睨廻
いて、

「やい、多一！」

「致します、致します。」

と呼吸を切つて、

「皆さん御免なさりました。」

多一はすつと衣紋を扱いた。

浅黄の素砲、侍烏帽子が、丸官と向う正面。藝妓、

舞妓は左右に開く。

其の時、膝に手を支いて、

「ま猿めでたうのう仕る、踊るが手許立廻

り、肩に小腰を譲合せ、静やかに舞うたりけ

聲を張つた、扇拍子、疊を軽く拍ちながら、

「筑紫下りの西國船、艫に八挺、舳に八挺、十六

挺の櫓櫂を立て、

「喝乎々々。あゝ惜い、太夫が居らぬ。千代鶴や

い、猿に成れ。一若、立たぬか、立たぬか、此奴。

えゝ！ 婆どもでまけて遣らう、古猿に成れ、此奴

等………立たぬな、おのれ。」

と立身^{たちみ}上^{あが}りに、盞^{さかづき}を取^とつて投^なげると、杯洗^{はいせん}の縁^{ふち}にカチリと砕^{くだ}けて、楓^{きよう}と缺^{かけ}らが四邊^{あたり}に散^ちつた。色^{いろ}めき白^{しろ}ける燈^{とも}に、一重^{ひとへま}瞼^{ぶち}の目^めを清^すしく、美津^{みつ}は伏^ふせたる面^{おもて}を上げ^あげた。

「あゝ、皆^{みな}さん、私^{わたし}が猿^{さる}を舞^まひまつせ。旦那^{だんな}さん、男^{おとこ}のためどす。畜生^{ちくじやう}に成^なつてな、私^{わたし}が天王寺^{てんわうじ}の銀杏^{いんぎよう}の下^{した}で、トン／＼踊^{おど}つて、養^{やしな}ふよつてな。世帯^{しよたい}せいでも大^{だい}事^じない、もう貴^{あんな}下^{した}、多^た一^{いち}さんを虐^{いぢ}めんとおくれやす。

ちやと隙^{ひま}もらうて去^いぬよつて、多^た一^{いち}さん、さあ、唄^{うた}ひいな、續^{つづ}いて、
と、襟^{えり}の扇^{せん}子^すを衝^つと抜^ぬいて、すら／＼と座^ざへ立^たつた。江戸^{えど}は紫^{むらさ}き、京^{きやう}は紅^{べに}、雪^{ゆき}の狩衣^{かりぎぬ}被^かけながら、下^{した}萌^もゆる血^ちの、うら若^{わか}草^{くさ}、萌^も黄^{えい}は難波^{なには}の色^{いろ}である。

丸官^{まるくわん}は掌^{てい}を握^{にぎ}つた。

多^た一^{いち}の聲^{こゑ}は凜^{りん}々^々として、

「しもにん／＼の寶^{たから}の中^{なか}に　　火^ひ取^とる玉^{たま}、水^{みづ}取^とる玉^{たま}・・・イヤア、」

と一つ掛けた聲が、忽ち切なさうに掠れた時よ。

（ハオ、イヤア、ハオ、イヤア、）霜夜を且つちる錦葉の音かと、虚空に響いた鼓の掛聲。

（コンコンチキチン、コンチキチン、コンチキチン、カラ、タツポツポ）摺鉦入れた後囃子が、遙に交つて聞えたは、先驅既に町を渡つて、前囃子の間近な氣勢。

が、座を亂すものは一人もなかつた。

「船の中には何とお寝るぞ、苦を敷寢に、苦を敷寢に楫枕、楫枕。」

玉を伸べたる脛もめげず、ツト美津は、疊に投げて手枕した。

其の時は、別に變つた様子もなかつた。

多一が次第に、齒も軋むか、と聲を絞つて、

「葉越しの葉越しの月の影、松の葉越の月見れば、しばし曇りて又冴ゆる、しばし曇りて又冴ゆる、しばし曇りて又冴ゆる、」

ト袖そでを巻まいて、扇子あふぎを翳かざし、胸むねを反そらして熟ちつと仰あふいだ、美津みつの瞳ひとみは氷こほれる如ごとく、瞬またぎもせずニみると齊ひとしく、笑えくぼ麿さつに楓かぜと影かげがさして、爪つまだ立つ足あしが震ふるへたと思おもふと、唇くちびるをゆがめた皓しろは齒はに、蒼つぼみのやうな血ちを嚙かんだが、烏帽えぼし子の紐ひもの亂みだれかゝつて、胸むねに千條ちすぢの鮮からくれなゐ血ち。

「あ、」

と一聲こゑして、ばつたり倒たふれる。人目ひとめも振ふりも、しどろに成なつて背せなに縋すがつた。多た一の片手かたての革てのひらも、我わが脣くちびるを壓おさへ餘あまつて、血ち汐しほは指ゆびを溢あふれ落おちた。

一座ざわつと立騒たちさわぐ。階子はしこへ遁にげて落おちたのさへある。

引仰ひきあをむ向むけて緊乎しつかと抱だき、

「美津みづさん！……二ふ、二人ふたりは毒害どくがいされた、

お珊さん、お珊さん、御寮人ごれうにん、お珊さんめ、婦をんな！」

「床几、」

と、前後の屋臺の間に、市女の姫の第五人目で、お珊が朗かな聲を掛けた。背後に二人、朱の臺傘を廂より高々と地摺の黒髪にさしかけたのは、白丁扮装の駕籠人足。並んで、萌黄紗に朱の總結んだ、市女笠を捧げて従つたのは、特にお珊が望んだと云ふ、お美津の爺の傳五郎。

印半纏、股引、腹掛けの若いものが、さし心得て、露じとりの地に据ゑた床几に、お珊は眞先に腰を掛けた。が、此は我儘ではない。練ものは、揃つて、宗右衛門町のこゝに休むのが習であつた。

屋臺の前なる稚兒をはじめ、間をものゝ二間ばかりづゝ、眞直に取つて、十二人が十二衣、色を勝つた南地の藝妓が、揃つて、一人づゝ皆床几に掛かる。臺傘の朱は、總二階一面軒毎の緋毛氈に、色映交はして、千本植ゑたる櫻の梢、廓の空に咲かゝる。白の狩衣、紅梅小袖、灯の影にちら／＼と、囃子の舞妓、藝妓など、霧に揺蕩つて、小鼓、八雲琴の調

を休むと、後囃子なる素袍の稚兒が、淺黄櫻を織交
ぜて、すり鉦、太鼓の音も憩ふ。動搖渡る見物は、
大河の水を堰いたやう、見渡す限り列のある間、一
一尺ごとに百目蠟燭、裸火を煽らし立てた、黒塗に
臺附の柵の堤を築いて、兩方へ押分けたれば、練も
のゝみが静まり返つて、人形のやうに美しく且つ凄
い。

唯其の中を、福草履ひた／＼と地を刻んで、袴の
裾を忙しさう。二人三人、世話人か、列の柵摺れに
行きつ還りつ、時々顔を合はせて、二人囁く、直ぐ
に別れて又一人、別な世話人と一寸出遇ふ。中に一
人落しものをしたやうに、うろ／＼と、市女たちの
足許を覗いて歩行くものもあつて、大な蟻の働振、
然も事ありげに見えるばかりか、傘さしかけた白丁
ども、三人ならず、五人ならず、眉を顰め口を開
けて空を見た。

其の空は、暗く濁つて、處々朱の色を交へて曇つ
た。中を一條、列を切つて、何處からともなく白氣
が渡つて、細々と長く、遙に城ある方に靡く。此を、

あたりの湯屋の煙、又、遠い煙筒の煙が、風の死したる大阪の空を、あらむ限り縫ふとも言つた。

宵には風があつた。其は冷たかつたけれども、小春風の日の餘残に、薄月さへ朧々と底の暖いと思つたが、道頓堀で小休みして、やがて太左衛門橋を練込む頃から、眞暗に成つたのである。

鴉は次第に數を増した。のみならず、白氣の怪みもある所爲か、誰云ふとなく、今夜十二人の市女の中に、姫の數が一人多い。凡て十三人あると言交はす。

世話人徒が、妙に氣にして、其となく、一人々々、數へて見ると、成程一人姫が多い。誰も彼も多いと云ふ。

念のために、他所見ながら顔を覗いて、名を銘々に心に留めると、決して姫が殖えたのではない。定の通り十二人。で、又見渡すと十三人。

式の最初、住吉詣の東雲に、女紅場で支

度はしたが、急にお珊が氣が變つて、社へ參らぬ、
と言つた爲に、一人俄拵へに數を殖やした。が、其
は伊丹幸の政巳と云つて、お珊が稚い時から可愛が
つた妹分。其の女は、と探つて見ると、現に丸官に
呼ばれて、浪屋の表座敷に居ると云ふから、其の身
代りが交つたと云ふのでもないのに。

其さへ尋常ならず、とひしめく處に、搗てゝ加へ
て易からぬは、世話人の一人が見附けた。――屋
臺が道頓堀を越す噴から、橋へかけて、列の中に、
たらたら、たら／＼と一雫づゝ、血が落ちて居ると
云ふのである。

一人多い、其の姫の影は臙でも、血のしたゝりは現に見て、誰が目にも正しく留つた。

灯影の影に地を探つて、穩ならず、うそ／＼捜もをして歩行くのは、其の血のあとを辿るのであらう。

消防夫にも、駕籠屋にも、敢て怪我をしたらしいのはない。婦たちにも様子は見えぬ。尤も、南地第一の大事な市の列に立てば、些細な疵なら、弱い舞妓も我慢して秘して退けよう。

が、市に取つては、上もなき可忌しさで。

世話人は皆激しく顰んだ。

知らずや人々。お珊は既に、襟に秘し持つた縫針で、裏を透して、左の手首の動脈を刺し貫いて居たのである。

但、初から不思議な血のあとを拾つて、列を縫つて検へて行くと、静々揃つて練る時から、お珊の袴の影で留つたのを人は知つた。

こゝに休んでから、それとなく、五人目の姫の顔を差覗くものもあつた。けれども端然として居た。黛の他に玲瓏として顔に一點の雲もなかつにじが、右手に捧げた橘に見入るのであらう、寂しく目を閉ぢて居たと云ふ。

時に、途中では然もなかつた。爰に休む内に、怪しき氣のこと、点滴る血の事、就中、姫の數の幻に一人多い事が、何時となく、傳へられて、烈しく女どもの氣を打つた。

自然と、髪を垂れ、袖を合せて、床几なる姫は皆、齊しくお珊が臨終の姿と同じ、肩のさみしい風情と成つた。

血だらけだ、血だらけだ、血だらけの稚兒だ――と叫ぶ――柵の外の群集の波を、鯨に追はれて泳ぐが如く、多一の顔が眞蒼に顯れた。

「お呼びや、私をお知らせや。」
とお珊が云つた。

傳五爺は、懷を大きく、仰天した皺嗶聲を振絞つ

て、

「多一か、多一はん　――　御寮人様は此處ぢや。」と喚く。

早や柵の上を蹠踉めき越えて、虚空を掴んで探したのが、立直つて、衝と寄つた。

が、床几の前に、ばつたり倒れて、起直り状の目の色は、口よりも血走つた。

「あゝ、待遠な、多一さん、」
と黒髪揺ぐ、吐息と共に、男の肩に手を掛けた。

「毒には加減をしたけれど、私が先へ死にさうでな、幾度目をば瞑つたやろ。漸と此處まで堪へたえも一度顔を、と思ふよつて　」

丸官の握拳が、時に、瓦の缺片の如く、群集を打ちのめして掻分ける。

「傘でかくしておくれやす。や、」と云ふ。
臺傘が颯と斜めに成つた。が、丸官の忿怒は遮り果てない。

靴足袋で青い足が、柵を踏んで乗らうとするのを、

一目見ると、懐中へ衝と手を入れて、兩方へ振つて、扱いて、投げた。既に袋を出て居た蛇は、二筋電の如く光つて飛んだ。

わ、と立騒ぐ群集の中へ、丸官の影は揉込まれた。一人渠のみならず、もの見高く、推掛つた兩側の干人は、一齊に動搖を立て、悲鳴を揚げて、泣く、叫いぶ。茶屋揚屋の軒に餘つて、土足の泥波を店へ咲と・津波の餘残は太左衛門橋、戎橋、相生橋に溢れかゝり、疊屋町、笠屋町、玉屋町を横筋に渦巻き落ちる。

見よ、見よ、鴉が蔽ひかゝつて、人の目、頭に、嘴を鳴らすを。

お珊に詰寄る世話人は、又不思議にも、蛇が、蛇が、と遁惑うた。其の數は唯二條ではない。

屋臺から舞妓が一人倒に落ちた。其處に、めら／＼と鎌首を立て、這ひかゝつたゝめである。

それ、怪我人よ、人死よ、と其處も此處も湧揚る。お珊は、心靜に多一を抱いた。

「よう、顔見せておくれやす。」

「口惜い。御寮人、」と、血を吐きながら頭を振る。

「貴方ばかり殺しはせん。これお見やす、」と
忘れたやうに、血が涸れて、蒼白んで、早や動かし
得ぬ指を離すと、刻んだやうに。緊乎と持った、其
の脈を刺した手の橋の、鮮血に染まったのが、重く
多一の膝に落ちた。

男は少時凝視めて居た。

「口惜いは私こそ、多一さん。女は世
間に何にも出来ん。戀し、愛しい事だけには、立派
に我まゝして見せう。

寶市の此の服装で、大阪中の人の見る前で、貴方
の手を引いて……なあ、見事丸官を蹴て見せ
う、と命をかけて思うたに……先刻盞させ
る時も、押返して問うたもの、お珊、お前へ心中立
や、と一言いうてくれはらぬ。

一昨日の芝居の難儀も、慥うした内證があるよつ
て、私のために、堪へやはつた辛抱やつたら、一生
に只た一度の、嬉しい思ひをしようもの、多一さん、

貴下は二十。三つ上の姉で居て、何で 恚うまで迷
うたやら、堪忍しておくれや。」
とて、はじめて、はら／＼と落涙した。

絶入る耳に聞分けて、納得したか、一度は頷いた
が、

「私は、私は、御寮人、生命が惜いと申しません。
可哀氣に、何で、何で、お美津を」

と聞きも果さず

「わあ、」と魂切る。

傳五爺の胸を壓へて、

「人が立騒いで邪魔したら、撒散かいて拂ひ退け
うと、お前に預けた、金貨銀貨が、其の懷中に澤山
ある。不思議な事で、使はいで濟んだよつて、其も
つて、な、えらい不足なやるけれど、不足、不足な
やるけれど、あゝ、術ない、最う身がなえ
て聲も出ぬ。」

お聞きやす、多一さん、美津さんは、一所に連れ
ずと、一人活かいて置きたかつた。貴方と二人、人

は交ぜず、死ぬのが私は本望なが、まだ此の上、貴方にも美津さんにも、濟まん事や思つたによつてな。違つたかえ、分つたかえ、冥土へ行てかて、二人をば並べて置く、遣瀨ない、私の身にも成つてお見や。」

幽ながらに聲は透る。

「多一さん、手を取つて……手を取つて……離さずと……左の此の手の動く方は、義理や、あの娘の手をば私が引く。」

「さあ、三人で行かうな。」

と床几を離れて、すつくと立つ。身動きに亂るゝ黒髪。髻弗つ、と真中から二岐に颯と成る。半ばを多一に振掛けた、半ばを握つて捌いたのを、翳すばかりに、浪屋の二階を指さした。

「おいでや、美津さんえ、美津さんえ。」

練ものゝ列は疾く、はら／＼に絲が斷れた。が、十一の姫ばかりは、さすが各自に名を恥ぢて、落ちたる市女笠、折れたる臺傘、飛々に、背を潜め、顔を蔽ひ、膝を折敷きなどしながらも、嵐の如く、中

の島籠めた群集が叫喚の凄じき中に、紅の袴一
人々々、點々として澣留まつた。

唯見ると、雲の黒き下に、次第に不知火の消え行
く光景。行方も分かぬ三人に、速く遠く前途を示す、
其が光なき十三の緋の炎と見えた。

お珊は、幽に、目も遙々と、一人づつ、其の燈を
視た。

【完】